

2009－10 年度 R I D 2800 寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ集



2009－10 年度

RI会長 ジョン・ケニー(スコットランド・グランジマスRC)

RI 第 2800 地区 ガバナー 佐藤 豊彦(天童RC)

RI 第 2800 地区 第4ブロック 寒河江RC会長 鈴木 一作

2009-10年度 RID 2800 寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ 目次

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1 <u>51周年 新たなる旅立ち</u> | 34 <u>社会に対する義務と責任</u> |
| 2 <u>会員スピーチの重要性</u> | 35 仲が良いことの心地良さ |
| 3 立派な人に | 36 命の教育 |
| 4 世界に一つだけの花 | 37 かわいがってもらうこと |
| 5 <u>SAAと理事会</u> | 38 生きていく上で大切な心 |
| 6 豊かな人生 | 39 <u>日米ロータリーの職業奉仕観</u> |
| 7 理と義と情 | 40 <u>例会は「学びの場」</u> |
| 8 <u>「奉仕」と「利益」</u> | 41 同じ釜の飯を食う |
| 9 <u>ロータリーの社会奉仕事業</u> | 42 JAへの期待 |
| 10 事業は人なり | 43 花を咲かせる |
| 11 <u>ロータリアンの矜持</u> | 44 <u>RYLAの今後</u> |
| 12 心の強さ・美しさ | 45 「心の強さ・美しさ」の反響 |
| 13 お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう | 46 思いは叶う |
| 14 志田周子先生の大井沢に集う | 47 会長年度を終えるにあたり |
| 15 迷える一匹の羊 | |
| 16 <u>ポール・ハリスの生い立ちと青春時代</u> | (下線は、ロータリー情報がテーマ:18回) |
| 17 思いを語る、思いを共有する | |
| 18 <u>ロータリー財団</u> | |
| 19 <u>人を学ぶ</u> | |
| 20 寒河江RCの心意気と実力 | |
| 21 立派な人が増える社会に | |
| 22 <u>年次総会に関連した問題点</u> | |
| 23 <u>少年のような心</u> | |
| 24 好意と友情で | |
| 25 年度下半期に向けて | |
| 26 佐藤豊彦ガバナーのメッセージ | |
| 27 <u>IMを考える</u> | |
| 28 もう一つの日本 | |
| 29 <u>IM 歓迎の言葉</u> | |
| 30 <u>色々ある国際奉仕</u> | |
| 31 尊敬できる大人 | |
| 32 丁寧さと誠実さ | |
| 33 自信と愛と志 | |



平成 21 年 (2009 年) 7 月 2 日

RID 2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

1. 51周年 新たなる旅立ち

1959 年に創立され、先輩諸兄が歴史と伝統を築き上げてきた寒河江 RC。50 年という半世紀が経過し、この栄えある年度に第 51 代の会長を受けましたことは、まことに身の引き締まる思いです。本日は、今年度の年次方針発表例会です。後ほど、詳しく説明させていただきます。

さて、今年度の国際ロータリー会長はスコットランドのジョン・ケニー氏で、RI テーマは「ロータリーの未来はあなたの手の中に」です。これは「ロータリアン一人ひとりの行動がロータリーの未来を決める」というもので、我々にロータリアンとしての誇りや責任をあらためて求めたものと言えるのではないのでしょうか。



また、2800 地区のガバナーは天童 RC の佐藤豊彦氏で、地区目標は「地域にやさしさを、ロータリーに活力を」です。具体的には、「クラブ運営の基盤づくり」ということで、会員の純増とクラブ組織の簡素化を目指しています。さらに、「ロータリーを学ぼう」ということで、ロータリー綱領、決議 23-34、ロータリー財団、米山奨学会などに対する理解、そして新会員の研修や青少年交換事業の充実を求めています。

こうした RI テーマや地区目標を受けて、私は寒河江 RC の会長として「51 周年・新たなる旅立ち」というテーマを掲げました。というのも、今年度は、入会以来、初めて理事に抜擢された方が 5 人もいます。そうした若い力の結集に加え、重鎮、ベテランとも言うべき志高い理事・役員 7 人が協力してくださいます。会長・幹事ともに未だ 50 歳代半ばの若輩者であるだけに、とても心強い限りです。まさに老壯青で智慧と力を出し合い、これまでの歴史と伝統をしっかりと引き継ぎながら、温故知新、温故創新という思いで、寒河江 RC 100 周年に向けた新たなる旅立ちの一年にしたいと考えています。

不況の波が全世界をおおう中、ともすれば自らの羅針盤すら見失いかねない経済状況ではありますが、我々はロータリアンとしての「自信と愛と志」を旨とし、「心の安定、心の繋がり、心の強さ・美しさ」を何よりも尊い価値として、右往左往することなく、邁進していける寒河江 RC であり続けたいと思います。

そして、そういう姿を貫くことが、地域や社会に貢献していくことにも繋がるものと信じます。その上で、会員間で「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」の4つの言葉と思いが自然と交わされる、信頼・誠実・励まし・感謝に満ちた楽しいクラブ運営を心がけていく所存です。

以上、「51周年 新たなる旅立ち」という思いを胸に、「温故知新」、「温故創新」、「自信と愛と志」、「心の安定、心の繋がり、心の強さ・美しさ」、「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」の5つのスローガンを大切にしながら、皆様の心に残る年度になりますよう、理事役員一同、精一杯頑張ります。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。ご清聴、有難うございました。

<参考>~~~~~

資 料

～ 年次方針発表 ～

R I テーマ ロータリーの未来はあなたの手に
(THE FUTURE OF ROTARY IS IN YOUR HANDS)

地 区 目 標 「地域にやさしさを、ロータリーに活力を」

寒河江ロータリークラブ



本年度は、「51周年・新たなる旅立ち」のテーマのもと、以下の5つのスローガンで邁進する1年といたします。それらスローガンに込めた私の熱い思いを、道下俊一氏のビデオ映像を通して語らせていただきます。

寒河江ロータリークラブ
～51周年 新たなる旅立ち～

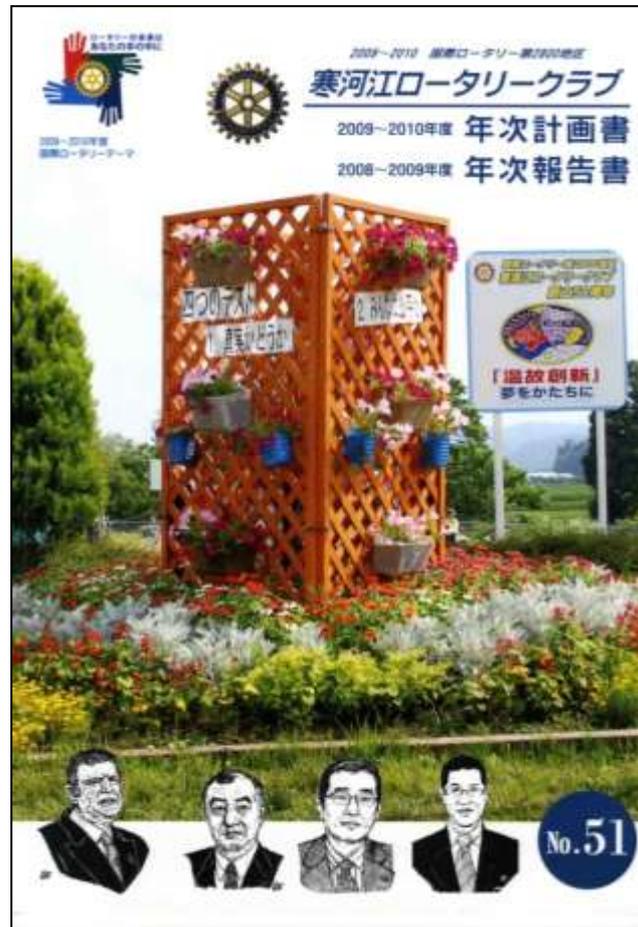
温故知新
温故創新
+

5つのスローガン

お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう
心の安定、心の繋がり、心の強さ・美しさ
自信と愛と志

51周年の事業の重点

- 1. クラブ奉仕事業** (温故知新、温故創新)
 - テーマにこだわる例会スピーチ
「心の強さ・美しさ」、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」
 - 敬愛と親睦を深め合う「地区大会」、「合同例会」、「懇親会」
- 2. 四大奉仕フォーラムの充実** (温故知新、温故創新)
 - 「51周年 新たなる旅立ち」に 相応しいフォーラム
- 3. 職業奉仕事業** (自信と愛と志)
 - 青少年を対象に、正しい職業観育成のための職業奉仕事業
- 4. 地域社会奉仕事業** (心の安定、心の繋がり、心の強さ・美しさ)
 - 「心の強さ・美しさ」をテーマとした青少年育成事業
- 5. 国際社会奉仕事業** (お願い、あなたが必要、頑張り、ありがとう)
 - 台湾斗南RCとの友情交換事業 (派遣と受け入れ)



2. 会員スピーチの重要性

本日は、上半期クラブ・アッセンブリです。前回お話しした「年次方針」の具体的計画について、各委員長から報告があります。それらをさらに確固としたものにするためにも、皆様から御智恵をお借りしながら、十分検討していただければ幸いです。

さて、ロータリアンで、ポール・ハリス（Paul Percy Harris）の名前を知らない人は恐らくいないでしょう。では、ガイ・ガンデイカー（Guy Gundaker）はどうでしょう。



Guy Gundaker

Guy Gundaker は、1923-24 年度の RI 会長です。その彼が著した「A Talking Knowledge of Rotary」は、最も純度の高い古典的なロータリー理論の解説書として知られています。実際、小堀憲助氏によるその日本語訳「ロータリー通解」は、日本全国の良心的なロータリアンに広く読まれ、ロータリー運動の水準低下を防いだと言われています。

私にとっては、安孫子貞夫 PG からいただき、何度も熟読・精読してきた大切な愛読書であり、私のロータリアンとしての骨格を作ってくれた本でもあります。寒河江 RC の今年度スローガンに「温故知新」、「温故創新」を掲げたのも、今こそ Guy Gundaker を学び直す時だと思うからです。

この本には、ロータリークラブの意義と役割が実に明解に書かれています。例えば、ロータリークラブの定義として、

ロータリーは、各職種の企業または専門職業から選ばれた者を以て構成し、かつ次の四つの目的を達成するために組織されたものである。

- 1. 会員の個人的向上**
- 2. 会員企業の向上**
- 3. 会員の属する職種全体の向上**
- 4. 会員の家・町・州・国ならびに社会全体の向上**

と記されています。

したがって、ロータリアンの義務とでも言うべき「ロータリアンの活動」にしても、この定義に則した実に分かりやすい内容が書かれています。すなわち、

ロータリアンの活動とは、①個人的な活動、②ロータリークラブにおける活動、③同業者の団体における活動、④公共的かつ慈善奉仕的な活動 の四つである。

もう少し具体的に言うと、

- ①「個人的な活動」とは、自己の企業または専門職種において、ロータリーの説く職業倫理と奉仕を実践し、ロータリーのバッジを信用と奉仕の象徴とすること。
- ②「ロータリークラブにおける活動」とは、クラブの会合に積極的に出席し、提起される諸問題について意見を交わし討論すること。かつ自己の企業または専門職業について大いに話をし、有益な知識・情報・アイデアを交換し合うこと。
- ③「同業者の団体における活動」とは、同業者に対して職業倫理と奉仕の理念を鼓吹し、広めること。
- ④「公共的かつ慈善奉仕的な活動」とは、良き市民として、良き組織人として奉仕活動を行うこと。

若い会員が少し違和感を持たれるとしたら、「クラブ活動」の中にある「自己の企業または専門職業について大いに話をし、有益な知識・情報・アイデアを交換し合うこと」という部分かも知れません。Guy Gundaker は、「ロータリアンの重要な特権の一つは、会員が自分の仕事を語る機会、そして聞く機会（すなわち、会員スピーチの機会）が保障されていることである」と明確に述べているのです。つまり、そうした「有益な知識・情報・アイデアの交換」は、ロータリアンにとって大きな特権なのだということです。

私は、それに加えて、「会員スピーチこそ、会員間の敬愛と親睦を深める最高の機会である」ことを強調したいと思います。なぜなら、それがクラブの活性化をもたらす原動力となるからです。

今年度の重点事業に掲げた「会員スピーチ例会」（一人 15 分、年間 16 人以上が目標）は、スピーチのテーマを「我が半生と仕事、ロータリーを語る」と予め決めています。

その理由の一つは、会員スピーチを、寒河江RCの「温故知新」、「温故創新」に繋げていきたいからです。もう一つの理由は、そういう会員スピーチは、会員間の敬愛と親睦を今まで以上に深め合い、さらなるクラブの活性化に繋がると信じているからです。

私自身も、この 1 年間、精魂こめて（まさに、命をかける思いで）会長スピーチを務めさせていただきます。ご理解とご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。ご清聴、有難うございました。

3. 立派な人に

今日は、ゲストスピーチ例会です。最初に、本日のゲストスピーチにお招きした寒河江市教育長の荒木利見先生をご紹介します。ようこそ、お出でくださいました。

さて、文部科学省の全国学力・学習状況調査によれば、「自分には良いところがあると思いますか？」という問いに対して「当てはまる」と回答した児童生徒は、全国・山形県ともに、しかも 2 年連続、小学生は 30%、中学生は 20%に過ぎませんでした。

さらに日本青少年研究所による日本、米国、中国、韓国の 4 カ国の最近の調査では、

**「自分は駄目な人間だと思えますか？」という問いに対して、「とてもそう思う」と回答した高校生は米中韓の3国が3～8%程度だったのに対し、日本はなんと23%。
「まあそう思う」という回答まで含めると、日本は65%で断トツの1位でした。**

子ども達にとって、自分が良いとか駄目とかの判断基準はどういうものでしょう。
試験の成績？ 運動能力？ それとも、人間性でしょうか？

これまで日本は、「自分は世界に一人だけの“かけがえのない存在”」をスローガンに、子供達の自尊心や自己肯定感を高める教育を目指してきました。しかし、調査結果を見る限り、成果は十分とは言えないようです。

考えてみれば、自分が世界に一人しかいないのは当たり前です。それだけで“かけがえのない存在”と言われても、子ども達は実感が湧かないのではないのでしょうか。むしろ、自らを立派と誇れる気持ちが芽生えるように導くことこそ、子ども達には大切なような気がします。

例えば、

**失敗しても悔しさから立ち上がり、頑張って自分の役割を最後まで果たす勇気と責任。
小さき者や弱き者を守り支える正義と優しさ。
人に尽くし、決して裏切らない誠実と信頼。
そして、卑劣を恥じる清い心。**

それらを尊い価値として子ども達の心に伝え育み、良き手本を示すことが我々大人の務めであり、子育ての基本であるように思います。

ところが、現実はどうでしょう。

人をちゃかして笑いころげるテレビ番組一、
勝ち組・負け組と煽り騒ぐマスコミ一、
贈収賄や偽造表示販売に手を染める大人一、

情けないことに、悪い手本ばかりが目立ちます。だからこそ、

“偉い人より、立派な人に”

これは、私の中学時代、卒業式の前日、恩師が最後の授業で語ってくれた言葉です。
すなわち、

「学力が優れていても、運動が得意でも、それだけでは立派とは言いません。
地位や財力があっても、ずるくて人を騙す者が立派なはずはありません。
立派というのは、心が強く美しいことを指す言葉です。
偉い人になれとは言いません。でも、立派な人になりなさい。」

本日は、長年に亘り、学校教育の現場で活躍されてきた荒木利見先生をお迎えし、
「寒河江市の子ども達に心の強さ・美しさを育むために」

というテーマでお話しいただきます。素晴らしいお話しを聞かせていただけるものと心から期待して、会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。



4. 世界に一つだけの花

本日は、青少年を対象とした職業奉仕ということで、寒河江高校農業校舎での「高校生就職支援例会」です。後ほど、ゲストスピーカーの佐藤淳教頭先生から、「最近の高校生」というテーマでお話しいたします。また、高校生には午前中、俳優の今田裕美子氏による表現力ワークショップに参加してもらい、午後からは我々ロータリアンが就職模擬面接指導を行います。

さて、SMAPの歌う「世界に一つだけの花」は嫌いだ！一、そう言う人が少なからずいるようです。それは概ね、次のような理由からでしょう。すなわち、

「人間は生まれた時から世界に唯一つだけの花であり、オンリーワンなのは当たり前。そんなことは、今さら言われるまでもない。しかも、ナンバーワンよりオンリーワンという主張は、ナンバーワンを目指し、日夜努力している人に対して、とても失礼だ。むしろナンバーワンこそ、本当のオンリーワンではないか。」

その一方で、今の日本には自尊感情を強く持てず、人生に意欲や志を見出せない若者が増えていきます。実際、社会で自分の居場所を見つけられない引きこもりやニートの数も少なくありません。そんな世相だからこそ、「世界に一つだけの花」は、幅広い世代の共感を呼んだのでしょう。

天台宗の開祖・最澄の言葉に、

「古人曰く、径寸十枚、これ国宝に非ず。一隅を照らす、これ則ち国宝なり」（山家学生式）

というのがあります。これは、中国の春秋戦国時代、魏の恵王と斉の威王による有名な国宝問答

「照千里、守一隅」（史記・田敬仲完世家）の故事を踏まえたものとされています。すなわち、

魏の恵王 「私の国には直径一寸の宝玉が十枚ある。これが国の宝だ。」

斉の威王 「私の国には、そんな宝玉はない。だが、自分の一隅をしっかりと守りながら千里を照らす人材がいる。これこそ、国の宝だ。」

最澄の言葉は、読んで字の如く、「一隅を照らす人こそが国宝」という解釈が一般的なようです。一方、今述べた故事のように、斉の威王の言葉「一隅を守りながら千里を照らすほどの逸材こそが国宝」という解釈もあります。

どちらの解釈が正しいかは別にして、「一隅を照らす」とは、人としての真摯な生き方を示すと同時に、人材の大切さ・素晴らしさを表す言葉として使われていることは確かでしょう。

私は、もちろん千里まで照らせる逸材には遠く及びませんが、せめて一隅を守り照らせる人間でありたいと思います。眼科開業医という仕事にしても、学校医にしても、小学校での絵本読み語りやロータリー活動にしても、そういう気持ちで続けてきました。

「世界に一つだけの花」という歌を嫌う人の気持ちは、私にもよく分かります。確かに人間は、生まれた時から既にオンリーワンでしょう。

しかし、生まれた時は単なるオンリーワンの「種」に過ぎないのではないのでしょうか。その「種」から自分なりの、いや自分だからこそ咲かすことができる立派な「花」に成長した人こそ、本当のオンリーワンだと思うのです。



すなわち、

「千里を照らせる花にならずとも、一隅を照らす花となれ」

なぜなら、誰もが自分の持ち場で最善を尽くし、一隅を照らし合えば、社会や未来は明るくなるのですから。

千里を照らすナンバーワンは、もちろん大事です。しかし、一隅を照らすオンリーワンだって大事です。どちらも立派な珠玉であり、「世界に一つだけの花」だと私は思います。

寒河江高校農業校舎の生徒さん達が、オンリーワンの「種」から自分なりの、そして自分だからこそ咲かすことができる立派な「花」に成長していくことを心から期待して、会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。



**就職面接って
こんな感じ!?** 寒河江

RCが高校で指導
寒河江市の寒河江高果樹園
芸科の3年生26人が、寒河江
ロータリークラブ（鈴木一作
会長）の会員らから就職試験
の面接のこつや自己表現方法
などを学ぶ「わくわくサ
ポート」が23日、同校農業校
舎で開かれた。

同クラブの職業理念教育の
一環。将来の仕事に向き合い、
コミュニケーション力を高め
てもらおうと2007年から
実施している。今回は模擬面
接に加え、表現力を身に付け
るワークショップも開催し
た。

模擬面接では、同クラブの
会員16人が面接官を務めた。

写真。生徒たちは、志望動機
や自身の長所など基本的な質
問のほか、「職業とは何」「嫌
な仕事は」といった問いに緊
張した面持ちで答えていた。
各界で活躍する会員たちは自
らの体験談や苦労話を紹介
し、「もっと堂々と話そう」
「気持ちのこもったあいさつ
は人の心を動かす」などとア
ドバイスした。

5. SAAと理事会

今日は、ガバナー補佐スピーチ例会です。我らが佐藤榮一ガバナー補佐、宜しくお願い申し上げます。

さて、皆さんはSAAの語源をご存知でしょうか？ 日本語では「会場監督」と訳されますが、実は Sergeant at Arms の略です。直訳は「武装した護衛官」で、中世英国の封建君主が身辺護衛のため任命した武装士官を指す名称でした。

当時はナイトに準ずる処遇を受けていたそうですが、議会制度ができた頃には、貴族院や庶民院における命令を執行し、秩序を維持する役人の名称となりました。さらに米国の上下両院でも、同様の役目を果たす人をSAAと呼ぶようになりました。それが、そのままロータリーに導入され、例会場の設営や秩序維持にあたる重要な存在として今日に至っています。実際、クラブ定款でも、会長・幹事と並ぶ役員としての地位が確立されており、SAAに対する歴史や伝統、理念が読み取れます。（参考文献：ようこそロータリーへ：佐藤千壽）

さて、先のクラブ・アッセンブリーで、会員から「SAAをクラブ奉仕委員会の小委員会の1つにすべきでは？」という意見がありました。CLPの理念からみると、確かにそれも合理的な考えであり、SAAがやっていることはクラブ奉仕に関する内容です。私も「なるほど」と思いました。

しかし、SAAの歴史や伝統、理念という点が気がかりです。実際、SAAはこれまで委員会と呼ばれたことはなく、各々の委員会からは独立し、その主体性が保証されていました。しかも私は、現SAAの井田氏を「SAAの歴史や伝統、理念」に相応しい、会長・幹事と並ぶ重要なクラブ役員として迎えました。もちろん、そういう気持ちを今年度の最初の理事会でも話し、その旨を理事・役員全員に了承してもらった次第です。

入会して間もない会員も多いので、理事会について少しお話しします。クラブ定款によれば、

**「クラブのあらゆる事項に関する理事会の決定は最終であって、
クラブに提訴する以外にはこれを覆す余地はない。」**

と明記されており、提訴については

**「理事会が指定した例会において、定足数の出席を得て、その出席会員の
3分の2の投票によってのみ、覆すことができる。」**

とあります。

なお、**クラブ定款の変更**については、クラブの名称と所在地以外の項目は、
「国際ロータリーの規定審議会によってのみ改正できる。」
とあります。

すなわち、クラブ定款については、クラブで変更することはできないということです。但し、クラブ細則については、ロータリー章典と国際ロータリーの定款・細則、そしてクラブ定款に反しない限り、変更することは可能です。

さて、クラブ・アッセンブリーでは、「寒河江高校農業校舎での就職支援事業は、職業奉仕ではなく社会奉仕では？」という意見もありました。個人的には「なるほど」と思います。

しかし、この事業は2年前、尊敬する白田政志氏が職業奉仕委員会の最重点事業として採り上げ、昨年は心熱い佐藤栄一氏がこれを受け継ぎ、事業成果も高く評価されてきました。また、この2年間、理事会で承認決定されてきた事業であり、私も昨年は会長エレクトとして、会長・副会長をはじめ他の理事と共に承認しました。また、昨年までのクラブ・アッセンブリーでは異論も出ず了承されてきたという意味では、クラブの総意と言っても良いでしょう。

一方、実際の就職支援事業の中身ですが、面接カウンセラーとなった会員は、誰しもロータリアンとしての自らの職業観を生徒達へ熱く語っていました。それは、普段の会員同士の会話でも、なかなか聞けない素晴らしい内容です。あたかも生徒らに語りかけながら、自らの職業意識を深めたに違いありません。また、それを聞いていた会員諸氏にしても、職業奉仕の精神を互いに高め合ったことになるのではないのでしょうか。そういう意味では、立派な職業奉仕事業と考える人もいるでしょう。

なお、ロータリー章典には、1987年にRI理事会で決定された「職業奉仕に関する声明」が掲載されています。それには、

「自己の職業上の知識や手腕を活かして、社会に奉仕をする」

ことも、大切な職業奉仕である旨が記されています。さらに、その2年後に出された「ロータリアンの職業宣言（1989年）」にも、同様な記載があるのです。まさに、高校生の「就職支援事業」は、これにピッタシではありませんか。先に述べたように、全てのロータリークラブは、ロータリー章典、国際ロータリーの定款・細則、クラブ定款について遵守義務があることも、我々は銘記しておかなければなりません。

最後に一。クラブ・アッセンブリーで出された意見は大いに尊重し、今後活かしていくべきでしょう。それには、先ず「温故」に照らし合わせて検討することが大切です。寒河江RCは、これからは温故知新、温故創新を大切にしていけるクラブであることを確信して、会長挨拶といたします。

6. 豊かな人生

今月は、会員増強・拡大月間です。本日は、寒河江RC会員の安藤博章さん、柏倉亮祐さんから、「私が考える会員増強・拡大」というテーマで、お話しをいただきます。

さて、便利な世の中になりました。例えば、

- ・お風呂を沸かすのも洗濯をするのも、ボタン一つで操作でできるのです。
- ・どこにいても携帯電話で連絡はとれますし、メールのやりとりだって簡単です。
- ・行きたい所には、車のナビが案内してくれます。
- ・高速道路や新幹線のおかげで、東京出張も日帰りが可能です。
- ・好きな映画も、テレビの専用チャンネルやDVDで見ることができます。
- ・パソコンがあれば、プレゼンテーション用のスライド作りから文書の記録・整理・保存まで、実に容易です。知りたいことも、インターネットですぐに調べられるのです。

戦後六十年を経て、私達はかつてないほど裕福となり、便利で快適、しかも効率的に、自分のやりたいこと、やらなければならないことが出来るようになりました。では、こうした恩恵に最もあずかっているはずの子ども達は、果たして心が満たされているのでしょうか。

私は山形県教育委員会の「いのちの教育」講師として、県内の学校で講演をしています。その講演後にもらった児童生徒の感想文を、幾つか紹介しましょう。

「僕はこれまで、勉強のできる事が一番大切だと信じていました」（小学生）

「学力より思いやりの方が大切だと言う大人に、私は初めて出会いました」（中学生）

「自信と愛と志のある若者を育てることが教育だと聞き、嬉しくて涙が出ました」（高校生）

読書離れのせいでしょうか。自ら考え、自ら行動する子どもを育てるがために、心をこめて価値や人生を語ろうとしない大人達のせいでしょうか。子ども達の心は、実は本質を求めているはずなのに、決して満たされてはいないような気がします。

私の診療所で、「おかげさまで」と答えた女子高生がいます。高齢者から聞くことはあっても、若者から聞くことは滅多にない言葉です。彼女は笑顔が素敵で、品のある利発で心優しい娘さんです。

一体どう育てれば、こんな素晴らしい若者に成長するのでしょうか。いや、育て方より、親の人間性こそ大切なのかも知れません。親が語る価値観や人生観に、子どもは自然と染まってくるような気がするからです。

「豊かな人生」とは、経済的に裕福で、便利で快適、効率的な生活をおくることでしょうか？

少なくとも、それ以上に大切なことがあるはずです。例えば、

「生き甲斐を持って働き、次代を担う若者を大切にし、老人を敬い、小さき者・弱き者を助け、支え、そして守り、真面目に生きている自分にささやかな喜びを感じ、良い家族と楽しい仲間、そして素晴らしい郷土に恵まれて、私は幸せだ。」

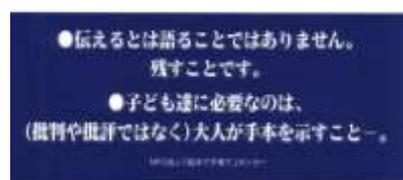
と思えるような人生でしょう。この言葉は、まさにその女子高生の父親から聞いた言葉です。



そういう豊かな人生を過ごしている人、目指している人、あるいは目指せる人が、この寒河江RCの新会員として益々増えていくことを期待して、本日の会員増強拡大月間例会の会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。



鈴木 一作
Suzuki Isamu



7. 理と義と情

本日は、台湾斗南友情交換例会です。これから例会場に、台湾斗南からのロータリアンと短期交換留学としての中学生をお迎えいたします。その際は、拍手でお迎えください。



私は、人間同士の関わりで大切だと思っていることが3つあります。それは、「理」と「義」と「情」の3つです。

「理」に対しては、人はうなずきます。「義」に対しては、人は従います。そして「情」で接すれば、人は感謝し、真心で応えようとしています。

今の世の中、「理」や「義」を説く人は幾らでもいます。しかし、それだけでは人はうなずき、ただ従うだけです。言い換えれば、「理」や「義」ばかりで「情」のない、心の貧しい人間は幾らでもいるということです。

何と言っても、人間同士の関わりで欠かせないのは「情」一。それを、私はこの寒河江RCで学んできました。今年度の寒河江RCスローガンの1つを

「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」

にさせていただいたのも、実はそういう気持からでした。

本年度の「重点」に掲げた4大奉仕事業の内容は、どれも委員長と委員、そして会員との間に、まさに「理」と「義」と「情」の3つが交わされないと成功しない大きなプロジェクトばかりです。

それだけに、事業の準備過程を見ていて、「理」と「義」と「情」に満ち溢れた委員長の心に、誰もが真心で応えてくれていることを何よりも嬉しく思います。そんな委員長の面々、そして心熱い皆さんと友達になれたことを、私は心から神に感謝し、かつ誇りに思っています。

今日から、台湾斗南RC友情交換事業が始まります。特に、心血を注いで準備してくださった国際社会奉仕委員会、クラブ奉仕委員会の皆様に感謝し、皆様にとって思い出深い素晴らしい1週間となることを祈念して、会長挨拶といたします。

では、台湾の皆様をお出迎えしましょう。

台湾斗南友情交換事業 歓迎挨拶

台湾斗南の中学生の皆様、団長の蔡さん、副団長の陳さん、顧問の趙さん、ようこそお出でくださいました。寒河江RC会員一同、心より歓迎申し上げます。斗南RCとは1996年に姉妹クラブが締結され、今年で13年目を迎えました。両クラブの友情が益々深まってきたことを、寒河江RCの会長として、とても嬉しく思っています。

ホストファミリーの皆様、素晴らしい友情交換事業を準備して下さった国際奉仕、クラブ奉仕の委員会の皆様、そして通訳の鈴木叔子さんをはじめ、ご協力をいただいた関係者の全ての皆様に、心より感謝申し上げます。

台湾斗南の皆様が、寒河江の素晴らしさ、山形県の素晴らしさを満喫するとともに、意義深い、そして思い出深い友情交換の1週間になりますよう祈念して、歓迎の挨拶といたします。

台湾斗南友情交換事業 歓迎晩餐会の開会宣言

寒河江RCの会員を代表し、敢えてこの場で、短期交換留学で台湾斗南に行く予定の遠藤奈菜さんに伝えておきたいことがあります。

人間同士の関わりで大切なことが3つあります。それは、「理」と「義」と「情」の3つです。貴女のお父さんは、その「理」と「義」と「情」の3つに満ち溢れた人です。この寒河江RCの誰もがそう思っています。

今回の台湾斗南友情交換事業は、貴女のお父さんが中心となり、寒河江RC会員の誰もが心熱くしながら準備をしてきました。それは、誰もが貴女のお父さんの熱意と頑張りに感謝し、真心で応えたいと思っているからに他なりません。私は、いや私達は、貴女のお父さんと友達になれたことを、心から誇りに思っています。貴女のお父さんと友達になれて誇りに思っている人間が沢山いるということを、どうか一生、覚えておいてください。

楽しく充実した1週間となるよう、遠藤奈菜さんをはじめ、台湾斗南友情交換事業に参加する若い皆様に心からエールをおくり、歓迎晩餐会の開会を宣言いたします。



8. 「奉仕」と「利益」

本日は、待ちに待ったガバナー公式訪問例会です。佐藤豊彦ガバナー、本日は宜しく願い申し上げます。

さて、ロータリアンになると必ず耳にする言葉の一つに、

“He Profits Most Who Serves Best”

があります。

直訳すれば、「最高の奉仕をする者に最も利益がある」となります。まさか、これを「素晴らしい奉仕をすると、とてもお金が儲かる」という意味で理解しているロータリアンはいないと思います。では、その「奉仕」とか「利益」とかは、具体的にどのようなものでしょう？

我々が大切にしている「決議 23-34」は、それこそ 1923~24 年度の RI 会長 **Guy Gundaker** の理解なしに論じることはできません。以前、皆様にも紹介した「**A Talking Knowledge of Rotary**」は、彼が書いた最も純度の高い、古典的ロータリー理論の素晴らしい解説書として知られています。



実際、小堀憲助氏によるその日本語訳「ロータリー通解」は、日本全国の良心的なロータリアンに広く読まれ、ロータリー運動の水準低下を防いだとも言われています。

本日は、Guy Gundaker の「奉仕」と「利益」に関する考え方を紹介いたします。

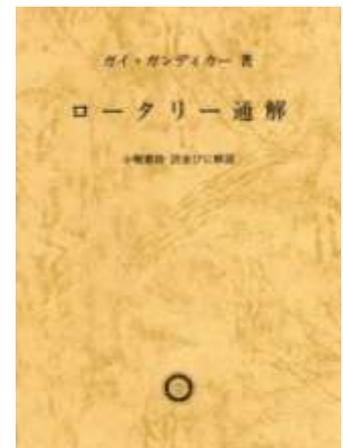
「A Talking Knowledge of Rotary」には、

「奉仕」とは、「ロータリアンの活動」そのものである
と書かれています。

そして、「ロータリアンの活動」とは、

- ① 個人的な活動
- ② ロータリークラブにおける活動
- ③ 同業者の団体での活動
- ④ 公共的かつ慈善奉仕的な活動

の4つです。



具体的には、以前にもお話ししたように、

- ①「個人的な活動」とは、自己の企業または専門職種において、ロータリーの説く職業倫理と奉仕を実践し、ロータリーのバッジを信用と奉仕の象徴とすること。
- ②「ロータリークラブにおける活動」とは、クラブの会合に積極的に出席し、提起される諸問題について意見を交わし討論すること。かつ自己の企業または専門職業について大いに話をし、有益な知識・情報・アイデアを交換し合うこと。
- ③「同業者の団体における活動」とは、同業者に対して職業倫理と奉仕の理念を鼓吹し、広めること。
- ④「公共的かつ慈善奉仕的な活動」とは、良き市民として、良き組織人として奉仕活動を行うこと。

したがって、それらの活動によって得られる「利益」とは、仕事上の儲け、すなわち「商品の原価と販売価格の差額」ではないことは明らかでしょう。むしろ、『ロータリアンの活動』という奉仕から得られる「利益」とは、

**「誰からも称賛される立派で気高い人物になれるということ、
それによって更に優れた奉仕を続けることができるということ、
そうして良い循環が回り続けるということ」**

です。

もちろん、その良い循環の過程で、「商品の原価と販売価格の差額」という適正な儲けも確保できるはず—ということになるわけです。逆に、儲けが適正でなく不当であれば、言うまでもなく、それは『ロータリアンの活動』そのものに反することになります。

このように、Guy Gundaker が考える “He Profits Most Who Serves Best” というのは、
**「奉仕が人格を磨き、人格が奉仕を高めるという『人格主義』こそ、
ロータリー運動の根本の1つ」**

ということを示す言葉でもあるわけです。

これに対して Arthur Frederick Sheldon の考え方もあるのですが、それについては別の機会にお話しいたします。

会員増強拡大月間に、敬愛する佐藤豊彦ガバナーを迎えることができた喜び、そして素晴らしい人格者の集まりである寒河江 RC に新たな仲間が益々増えていく期待を胸に、本日のガバナー公式訪問例会の会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。

平成 21 年（2009 年）9 月 3 日

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

9. ロータリーの社会奉仕事業

本日は、新世代のための月間例会であると同時に、寒河江さくらんぼRCとの合同例会です。ゲストスピーチでお招きした今田裕美子さんには、7 月、寒河江高校農業校舎の生徒さん達に「表現カワークショップ」をしていただきました。今田さん、本日は宜しくお願い申し上げます。

さて、ロータリアンになると必ず耳にする言葉の一つに、“地域のニーズに合った社会奉仕” というのがあります。すなわち、それは

「地域のニーズを精査・検討し、それに相応しい社会奉仕事業をしよう。」

という意味です。

ところが、しばしばこれは、「地域や奉仕対象先が望むことをRCの事業として採り上げる」という意味で使われます。例えば、河川や公園の清掃事業、障害者団体への寄贈や慰問、アイバンク・腎バンクへの募金活動や献血運動一。もちろん、それらは大切な社会奉仕活動ですが、ライオンズクラブなど、既に他の慈善奉仕団体が実施している事業であることも確かです。

何より、我々が大切にしている「決議 23-34」には、

**「RCは、他の市民団体や機関が既に実施している社会奉仕事業は
行うべきではない。行うなら、現存の機関に協力する形が望ましい。」**

という主旨の言葉が記されていることを忘れてはなりません。

そういう意味では、現在 2800 地区で行われているようなRYLAなら、既に同様な事業を継続的に実施してきた教育委員会やボーイスカウトを協力する側に回る方が、ロータリーの「あるべき姿」かも知れません。

なぜなら、RYLA本来の主旨や目的を考えれば、残念ながら今のところ、ロータリーに相応しいRYLA、ロータリーだからこそできるRYLAにはなっていないように思うからです。

むしろ、左沢高校のインターンシップを継続的に協力してきた第4ブロックの各RCの活動の方が、上記の「決議 23-34 の内容」に合致しているのではないのでしょうか。

寒河江RCが“アンデルセン読み語りの会”とともに実践し、市内全域への普及に協力してきた「小学校での絵本読み語り活動」は、始めてから既に 12 年の歳月がたちました。今では、県内はおろか全国の多くの小学校で実施され、その重要性も高く評価されています。

そうした功績に対し、昨年、“アンデルセン読み語りの会”は文部科学大臣賞を受賞したわけですが、それはまさしく、「決議 23-34」にある

「RCは事業を始めたり指導したりするが、それに関心を持つ他の全ての団体の協力を得るように努力すべきであり、RCに帰すべき功績が得られたとしても、それは協力者の手柄とするべきである。」

という主旨に合致した内容だと思えます。

しかし、その「小学校での絵本読み語り活動」は、決して地域や小学校から望まれて始まった事業ではありません。むしろ逆に、

「小学校での絵本読み語りボランティアは、小学校にとっても、また地域に住む者にとっても必要なこと・大切なことであり、ぜひ、我々にやらせて欲しい。」

という“アンデルセン読み語りの会”からの要望を、小学校側が受け入れて始まった事業です。

実際、寒河江小での絵本読み語りは、学校現場では反対の声も多くあり、最後は当時の校長、鈴木勲先生の英断で始まりました。今では当たり前となった「地域に開いた学校づくり」は、当時の学校現場にしてみれば、簡単には受け入れ難いスローガンだったということです。

ロータリーの社会奉仕にとって、地域のニーズとはどういう意味でしょう？ 私は、「地域が望むこと」ではなく、「地域にとって必要なこと・大切なこと」と理解しています。すなわち、

**ロータリーは、深い洞察や先見性という視点から、
「地域にとって必要なこと・大切なこと」を考え抜き、それが
価値ある社会奉仕と判断できたものこそ、大いに実践に移すべきだ**

と思うのです。

今年度の社会奉仕事業は、「子ども達に心の強さ・美しさを育む」をテーマに掲げました。

現在、教育界では「心の安定」や「心の繋がり」ばかりが重視されています。もちろん、それらも大切ではありますが、最近の世相からも明らかなように、

今こそ最も必要で、かつ最も大切な教育は、「心の強さ・美しさ」である
と思うからです。

次代を担う新世代の育成に益々貢献していくロータリアンでありたいと願いながら、本日の会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。

平成 21 年 (2009 年) 9 月 10 日

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

10. 事業は人なり

本日のクラブ創立記念例会は、「クラブ奉仕を考える」をテーマとしたクラブ奉仕フォーラムです。最初に、会員の安孫子貞夫 P G と大竹正さんから基調講演をしていただき、その後、テーブル・ディスカッションをお願いします。

なお、今年度は、今回のクラブ奉仕フォーラムに加え、10 月に職業奉仕フォーラム、2 月に国際奉仕フォーラム、3 月に社会奉仕フォーラムの計 4 回のフォーラム例会を予定しております。

さて、私が初めて寒河江 RC の理事をさせていただいたのは、10 年前の亀山・木村年度でした。社会奉仕委員長として、なんと年度当初の 7 月中旬、しかも陵東中・陵南中・陵西中および寒河江小・中部小の合計 5 校で大石邦子先生の講演会を開催するという、今考えると無謀とも思える奉仕プロジェクトを実施しました。

私自身、それ以降、理事役員を何度か経験していく中で、「準備や根回しの仕方」、「事業の成功には、理と義と情の 3 つが欠かせないこと」など、痛いほど学ばせていただきました。

それだけに 10 年前、亀山会長と木村幹事には、理事初心者であった私の準備不足や不手際に対して、数多くの批判や不協和音が届いていたのではないのでしょうか。

実際、そういう状況を見かねたからでしょう。計画どおりに物事が進まず悩んでいた私に対して、奥山辰夫（故人）副委員長はじめ委員会メンバーからの誠心誠意の智恵と協力、そして何と云っても亀山会長と木村幹事の「期待、忍耐、励まし、思いやり」は半端ではありませんでした。そのおかげで、どうにか事業を成功に導くことができたのだと思っています。

実は、その「期待、忍耐、励まし、思いやり」を分かりやすく、かつ情のこもった言葉で言い換えたのが、今年度のスローガン

「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」

なのです。

人を育てるにしても、意気を感じて良い仕事を成し遂げるにしても、生きる喜びを実感するにしても、「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」という言葉が如何にキー・ワードであるかは、企業経営者ならずとも、人の上に立つ者なら誰でもお分かりかと思えます。

今年度は、入会以来、初めて理事に指名された方が5人います。右も左も分からないまま突っ走った未熟な私の時と違い、計画や段取りが上手で、事業を成功に導く彼らの手腕の見事さに感心しています。まさに、「**事業は人なり**」です。

そうは言っても、理事初心者です。多少の不便やトラブルはあったかも知れませんが、それでも、ベテラン理事役員をはじめ、会員の誰もが助言や協力を惜しまず応援してくださり、賞讃に値する素晴らしい事業を成し遂げてきたことに、私は只々感謝するのみです。

さて、本日9月10日は、まさに寒河江RCの創立記念日にあたります。この記念すべき日に、創立記念例会として「クラブ奉仕を考える」というフォーラムを開催できるのは、とても意義深いものと思います。

クラブ奉仕は、ロータリーの四大奉仕事業の中では地味な部類かも知れませんが、SAAを助けながら充実した例会を作り上げていくという点で、また会員間の親睦や信頼を深め合っていくという点で、とても大切な役割を担っています。

また、先ほども申し上げたように、今年度も職業奉仕や国際奉仕をはじめ、各委員会の活躍は目を見張るものがあります。しかし、それらの委員会事業が上手くいったのも、例えば先月の「台湾斗南友情交換例会」ひとつとっても、クラブ奉仕委員会の協力があったからこそ—ということをお忘れにはならないと思っています。



特に、荒木浩クラブ奉仕委員長が、どれほど考え抜き、どれほど心を砕きながら、それらの事業を陰でしっかり支えてくださったことか—、私は痛いほど知っています。まさに、「**事業は人なり**」です。

クラブ創立記念例会にあたり、荒木浩クラブ奉仕委員長の誠実な人柄と努力に心から敬意を表すとともに、各委員会の益々の活躍、そして本日のクラブ奉仕フォーラムの成功を祈りながら、本日の会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。

平成 21 年 (2009 年) 9 月 17 日

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

11. ロータリアンの矜持

本日は、会員スピーチ例会です。今年度の会員スピーチ例会は、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマとして、お話しをいただくことになっています。本日は、会員の武田稔さん、大江俊悦さんのお二人です。

Paul P Harris は、著書「My Road to Rotary」の中で次のように述べています。

「ロータリークラブがメンバーをより良き人間へと導いていく道の一つは、心の中に宿る “少年” を失わせないこと、蘇らせることなのです。」

実際、私が敬愛するロータリアンは、

「仕事や経営に緊張と多忙の日々を過ごす中、ロータリーでは気を許し合った仲間と奉仕を語り、人生を語る。知恵と汗と時間と多少のお金を出し合い、様々な奉仕に夢中で取り組む。なにより、そんな仲間との時間を楽しいと思う。」

まさに、そんな少年少女のような純真な心の持ち主ばかりです。だとすれば、ロータリアンの喜びとは、ロータリアンの矜持とは、どういうものでしょう。私は、次のように思っています。

**ロータリーは、本来なら出会うこともないであろう異業種の会員が、
ロータリーの志を共にする仲間となって睦み集う「親睦の喜び」、
仕事や自己の在り方を「学ぶ喜び」、
生活のあらゆる場面で社会に貢献する「奉仕の喜び」。
そして、それらを楽しいと思う少年少女のような「純真な心」。
なにより、自らを「我、道義の職業人たらん」と律し、
多少なりとも自分は立派な人間であると思う「自尊心」。**

本日の会員スピーチでは、お二人から、まさに“ロータリアンの矜持”と言えるようなお話が聞けるものと期待して、会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。

12. 心の強さ・美しさ

本日は、ゲストスピーチ例会です。新世代のための月間に相応しいゲストスピーチということで、醍醐小学校で校長をされている安孫子一彦先生をお招きいたしました。

さて、今の日本で、最も大きな課題はなんでしょう？ 不景気、医療崩壊、年金問題、少子高齢化、過疎・過密など、難問は山積みです。しかし、私が最も心配しているのは、日本人としての誇りです。

それは例えば、

「仁義礼智信」を重んじる心、

「誠実・責任・信頼・正義・優しさ・勇気」を旨とする心、

そしてなにより、

「卑怯」を恥じる心

でしょう。

「篤姫」、「天地人」、「官僚たちの夏」などのTVドラマを見ていて、同じ思いを抱いた方も多いのではないのでしょうか。

卑怯と言え、少し前になりますが、高校の必修科目の未履修は卑怯です。「決まりよりも損得だ、ばれなければいい、ばれるわけがない」一。しかもそれは、多くの高校教師がほぼ全国でやっていたのです。

看護師が不足しているから、もっと足りないタイやフィリピンから金を積んで連れてくる一。これだって、私の感覚では卑怯です。

贈収賄や偽造表示販売、さらには家族思いの高齢者を平気で騙す「振り込め詐欺」や「リフォーム詐欺」に至っては、卑怯の極致と言ってよいでしょう。

まさしく、それは

卑怯な日本、美しくない日本の姿です。

今年度の寒河江RC社会奉仕事業の1つとして、市内の小中学生に「心の強さ・美しさ」というテーマで作文を募集しました。350余りの作文が集まりましたが、嬉しいことに、子供達の誰もが例外なく、

「心の強さ・美しさ」

を人間としての大きな価値と考えています。

ところが、その一方で、大多数の子供達は「でも自分は弱い、美しくない」と述べているのが気になります。実際、青少年に対する最近の各種調査でも、「子供達の自信、意欲、志の低さ」が大きな問題となっているのです。

私は今、県の教育懇話会の委員をしています。これは、県教育委員会の外部評価組織です。その会議の席で、私は現在の「心の安定、心の繋がり、コミュニケーション」を主体とした山形教育に、「心の強さ・美しさ」という柱も入れるべきではないかと強く提案しているところです。

「心の強さ・美しさ」を柱とした教育については、全国的にも京都府教育委員会をはじめ、既に同様な動きが始まっています。それだけに、「誇り（心の強さ・美しさ）を育む教育」が、今後、大きな流れになっていくことを切望しているところです。皆様は、如何お考えでしょうか？

本日は、「強さ」を学校教育目標に掲げている醍醐小学校の校長、安孫子一彦先生をお迎えし、「心の強さを育む学校」というテーマでお話しいたします。

素晴らしいお話を聞かせていただけるものと期待して、会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。



RID2800 2009-10年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

13. お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう

地区大会、お疲れさまでした。地区指導者育成セミナーでは、私の好きな「決議 23-34」について、安孫子貞夫PGと藤川享胤PGが熱く語って下さいました。あらためて、頭の中が整理できたように思います。

本日は米山月間例会ということで、地区の米山奨学会委員で寒河江RC会員の池田郁太郎さんから、「米山奨学会の現状と課題」というテーマでお話しいただきます。



さて、皆さんは、平成 15 年と 18 年にテレビで放映され、人気を博した『Dr コトー診療所』という番組を覚えていらっしゃるでしょうか？ それは、孤島の医療を一人で担う青年医師と島の住民との物語です。

実は、その物語の中で何度も繰り返して出てきた言葉がありました。それらの言葉を耳にするたびに、テレビの前で涙ぐんだ人もいたと思います。それらの言葉とは、

お願い あなたが必要 頑張れ ありがとう

の4つです。

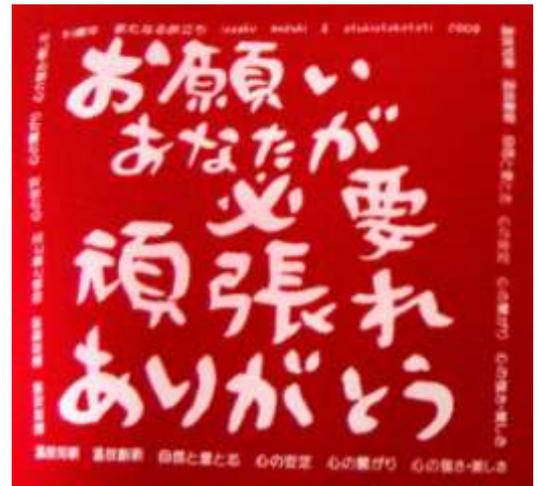
この4つの言葉に込められた思い。すなわち、お願いと懇願され、自分を必要とされ、頑張れと励まされ、ありがとうと感謝される。生きていて一番嬉しいのは、まさしく、この4つの言葉の思いに触れた時ではないでしょうか？

会社でも、工場でも、農家でも、料理屋でも、警察でも、学校でも、病院でも、そして家庭でも、この4つの言葉や思いを交わし合える中で生きていけるということが、人間にとって最高の「生きる喜び」だと私は思います。

それだけに私は、ロータリアンとしての奉仕事業においても、そうであって欲しいと願い、「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」を本年度の寒河江RCのスローガンの1つに掲げた次第です。

来月の市民公開講座「子ども達の心の強さ・美しさを考える集い」に向けて、社会奉仕委員会は頑張っています。まさに、「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」の精神で、子供も、大人も、小学校も、中学校も、市と県の教育委員会までも巻き込みながら、準備してくださっています。

こんな大変な事業でも、平然とやってのけてしまい、格段の成果を上げてしまうというのが、寒河江RCの底力なのだと思います。



本当に頭が下がります。この通り頭を深く下げて、本日の会長挨拶といたします。

14. 志田周子先生の大井沢に集う

本日は、西川月山RCとの合同例会です。本年度のテーマの1つでもある

「心の強さ・美しさ」

に関連して、志田周子先生が診療されていた、ここ大井沢の地で例会を開けることを嬉しく思います。

本日のゲストスピーチは、志田周子先生と所縁のある志田峰雄さんをお願いしました。楽しみにしております。



また、届いた心配りと準備をしてくださった西川月山RCの桜井久夫さん、寒河江RCの荒木浩クラブ奉仕委員長、そして関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

本日は志田周子先生の人柄と業績を偲びながら、そっと過ぎゆく短い秋の一日を皆と笑い語らい、楽しく過ごせたらと願い、本日の会長挨拶といたします。



本日の会長挨拶は、その「心の強さ・美しさ」に関連して、リーダーについてお話しさせていただきます。

「迷える一匹の羊と残り四十九匹の羊と、どちらを大切にするか？」

これに対して、山形市立第三中学校の前校長・川部昌平先生は、

**「迷える一匹の羊を大切にする教師は、残り四十九匹も大切にする。
逆に迷える一匹を大切にしない教師は、残り四十九匹を大切にできない。
迷える一匹をどう扱うか、残りの四十九匹は注目して見ているのだ。」**

と述べています。

この話を聞いて、私は中学時代の「ある出来事」を思い出しました。

それは理科の実験中、操作を誤った生徒の目に塩酸が飛入した時のことです。教師はすぐ水道水で数分間の洗眼をした後、「みんな、あとを頼むぞ」と言い残し、その生徒と一緒に近くの眼科医院へ向かって飛び出しました。

学級委員は職員室へ報告に行き、自習の指示を受けた我々クラス四十九人は、二人の帰りを静かに待ったのです。そして、生徒の目は助かりました。

眼科医の私からみても、それは最善の対応だったと思います。洗眼後15分以内に治療しなければ、生徒の目は重篤な後遺症を残したかも知れません。

ところが、通常の学校安全マニュアルからみると、実はかなり問題が多い対応でした。

例えば、

保健室へ連れて行かなかったー、
養護教諭に対応を任せなかったー、
校長や保護者への連絡が後回しだったー、
何より、授業を放り出したー、

このように、批判材料には事欠かない対応だったのです。

その恩師の口癖の1つは、

**“目の前の弱き者、迷える者を救え。そのために全力を尽くせ。
それが、本当のリーダーだ。”**

中学時代、団結力と一体感のあるクラスを築けたのは、この恩師のおかげです。

予測もしない突然の危機的状況を迎えた時、有能と思われていたリーダーでさえ、しばしば組織の規則や論理を優先させます。そればかりか、自己の立場や利益を守らんがため、「逃げる、ごまかす、誰かのせいにする」といった政治家や経営者もいたはずで

果たして、組織や自己の利害にとらわれず、先頭に立って危機を解決しようとするリーダーは一体どのくらいいるでしょう。まして、それが「迷える一匹の羊」だけの危機だったとしたらどうでしょう。情けないことに、そういう勇気あるリーダーを、組織や自己の利害を省みない愚か者と、非難・嘲笑する連中も世間には沢山いるでしょう。

こんな私でも、周囲から何を言われようと、勇気あるリーダーの皆さん同様、一人の迷える人間を救えるなら一という気持ちは持っています。まして、その迷える一人が若い少年少女だったとしたら尚更です。

それもこれも、寒河江RCに入会させていただいたおかげだと思っています。ご清聴、有難うございました。

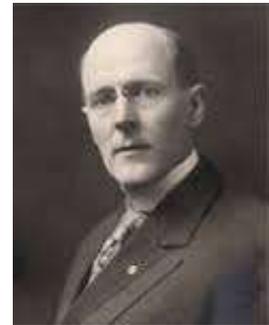


16. ポール・ハリスの生い立ちと青春時代

本日は、職業奉仕フォーラムです。今年度は、スローガンの一つに「**四大奉仕フォーラムの充実**」を掲げています。安孫子貞夫 PG の基調講演をもとに、「私が考える職業奉仕」というテーマで、大いに語り合っていたいただきたく存じます。

さて、ロータリー運動は 1905 年 (明治 38 年) 2 月 23 日、アメリカ合衆国イリノイ州シカゴの一青年弁護士であったポール・パーシー・ハリス (Paul Percy Harris) と彼の友人 3 人の集まりから始まりました。

不思議なことに、ポールの生い立ちや青春時代を知っているロータリアンはあまりいないようです。実は、とても興味深いものがあります。3 歳の時に父親が破産し、妹は母の元に、兄とポールはニューイングランドのヴァーモント州にある父親の実家に身を寄せました。その後、兄は伯母の元に引き取られ、彼だけが祖父母の家で育てられたのです。



アメリカ東北部に位置するニューイングランド地方は、宗教的自由と良心の自由を求めて植民した人が集まっていました。ピューリタニズムに根ざす個人の尊厳と独立を基調とした誇り、そしてニューイングランドの自然の厳しさに対する闘いから得た勤勉さがあったそうです。

そうした宗教心、良心、独立心、勤勉、実直な生活態度を、彼は祖父母から身につけたのでしょう。実際、彼は晩年の追想録で、

「長い年月を顧みれば、人生でそれほど重要とは思わなかったものが、実はそれこそ極めて重要であったことに気がつくものです。例えば、犠牲・献身・名誉・真実・誠意・愛一、これらは古くからの善良な家庭で受け継がれてきた、素朴で高潔な特質です。」

と述べています。

ポール・ハリスの少年時代は、聡明ではあっても勝気にはやる乱暴者だったと言われています。

入学したブラック・リヴァ幼年学校は中退し、ヴァーモント大学も素行不良で退学を命ぜられています。その後、プリンストン大学に入学しましたが、祖父が亡くなったために中途退学せざるを得なくなり、1 年間の就職の後、アイオワ州立大学法学部に入学しました。

アイオワに出発する際、祖母は彼に向かって、

**「ポール、あなたは世の中の人々に大きな借りがありますよ。
一人前になったら一生懸命働いて、その借りをお返しするような
立派な生活をしなければなりません。」**

と述べたそうです。

しかし、その祖母も、彼がアイオワ州立大学在学中に亡くなりました。こうした逆境や不遇の中、1891年、彼はアイオワ州立大学を卒業し、弁護士資格を取得しました。

ところが彼は、すぐに弁護士を開業せずに、5年間の放浪の旅に出ています。カルフォルニア、コロラド、フロリダ、さらにワシントン、ケンタッキー、テネシー、ジョージア、ヴァージニアと渡り歩き、海を渡ってロンドン、リヴァプールにも行きました。帰国後は、キューバやバハマ諸島も訪れています。

経済的に恵まれなかった彼は、行く先々で新聞記者、大学講師、カウボーイ、農園労働者、俳優、水夫などをやっています。特に、フロリダ州のジャクソンヴィルで大理石と花崗岩採掘業を営んでいたジョージ・クラークの元で働いたことが契機となり、彼の会社の代表としてフランス、イタリア、オーストリア、オランダ、ベルギー、イギリス、スコットランドなどを視察しています。

こうした各地各国の放浪生活を通して、

**「人類は伝統と慣習の違いから様々な思想と制度を持つものの、
その根本は善意と友愛に支えられている。」**

ということを、彼は思い知ったそうです。

5年間の放浪生活を終えたポールはシカゴで弁護士事務所を開業し、その後、ロータリークラブを創立しました。ロータリークラブ創立の理由として、「寂しかったからだ」という彼の言葉は有名です。

しかし、ロータリー運動が国境を越え全世界に広まっていった理由は、なんと言っても、その崇高な理念や手法の素晴らしさでしょう。そして、それらの基盤は、実は彼のそれまでの人生の中で、無意識のうちに既に出来上がっていたような気がしてなりません。皆様は、如何お考えでしょう？

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

17. 思いを語る、思いを共有する

本日は、会員スピーチ例会です。「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマに、会員の松田信弥さん、市川芳章さんから、お話しいただきます。

前回の職業奉仕フォーラムでは、敬愛する安孫子貞夫 PG から会員スピーチ例会の大切さが指摘されました。私も全く同感で、7月9日の会長挨拶でも述べたように、今年度の重点の一つとして、会員スピーチを多くするとともに、年間を通して「我が半生と仕事、ロータリーを語る」というテーマで語っていただくことを決めています。

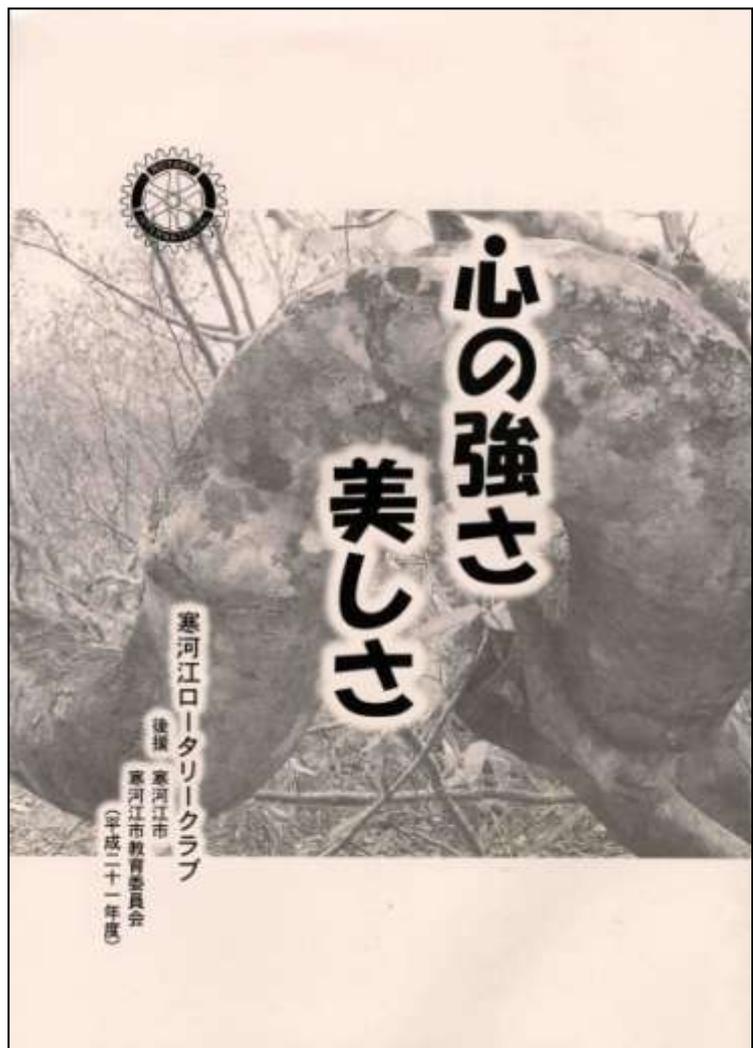
もちろん、それは Guy Gundaker の「A Talking Knowledge of Rotary」にもあるように、会員間の友情と敬愛の念を深め合い、今後の我々のロータリー人生の糧ともなるはずです。

さて、皆様の御協力のおかげで、寒河江市内の小中学生 350 人による「心の強さ・美しさ」の文集が完成いたしました。早速、詩や作文を応募してくれた児童生徒全員に配布したところです。

皆様にも一冊ずつお渡しいたします。お持ち帰りの上、ご自宅でゆっくりお読みください。

読んでいただければ分かるように、子供達は誰もが「心の強さ・美しさ」を大きな価値として捉えています。しかも、それに憧れているのです。

ところが、「でも、自分の心は強くない、美しくない」と書いている子供が少なくないのです。



私としては、子ども達が文集を読み合うことで互いの思いや価値観を共有し、それが一体感や安心感、さらには友情や敬愛に繋がってくれればと思います。

実は、今回の事業を実施するにあたり、その意義や手法について多くの校長、教頭先生からアドバイスをいただきました。その誰もが異口同音に、

- ① 心の強さ・美しさは、学校現場においても今日的で、かつ切実な教育課題です。
- ② 子供達が原稿用紙に向かい、心の強さ・美しさというテーマで人としての価値や生き方などを考えること自体、大きな意味があります。
- ③ 「人権」作文や「小さな親切運動」作文などと違って、子供達にとっても、他の生徒がどういうことを書いたのか大いに興味があるテーマです。それだけに、全員の作品を載せた文集を作り、それを全員に配布してくれるのは嬉しいです。子ども達は、きっと同学年は勿論、年上、年下の仲間の作品もしっかり読むはず。それこそ、自尊感情や価値ある生き方の芽生え、深まりに繋がると思います。

という内容を語ってくれました。その上で、今回の寒河江RC地域社会奉仕事業に、大きな期待と感謝を寄せてくださいました。

我々の会員スピーチにしても、学校関係者と語り合うことにしても、また子供達が作文を書いたり読んだりすることにしても、「思いを語る、思いを共有する」ということを通して、互いの友情や敬愛の念はもちろん、人生もより深まっていくのではないのでしょうか。皆様は、如何お考えでしょう。

18. ロータリー財団

本日は、ロータリー財団月間例会です。国際ロータリーのロータリー財団は、1917年に基金として発足し、1928年の国際大会でロータリー財団と名付けられました。

ロータリー財団章典によれば、ロータリー財団の使命は、

「ロータリアンが、健康状態を改善し、教育への支援を高め、貧困を救済することを通じて、世界理解、親善、平和を達成できるようにすること」

とあります。

その使命を果たすため、現在2つのプログラム、すなわち「教育的プログラム」と「人道的補助金プログラム」が進行中です。我々もよく耳にする、そして協力してきたGSEや財団奨学生派遣などは教育的プログラムに、またマッチング・グラントやポリオプラスなどは人道的補助金プログラムに相当します。(手続要覧を参照)

それ以外にも、あまり耳慣れないプログラムありますが、多種多様な財団寄付とともに、それらがロータリー財団になじめないロータリアンが多い理由の1つかも知れません。実際、最近のロータリー財団の在りように些か批判的な先輩ロータリアンもいらっしゃるようで、ロータリーの友、周年式典、地区大会などで、財団改革の必要性を耳にする機会も増えてきたような気がします。

さて、ロータリーが日本で発展した理由は、もともと我が国には、「商人道」とでも言うべき職業倫理観が根づいていたからだと言う人が少なくありません。その先駆者として、石田梅岩、二宮尊徳、近江商人などを挙げる人もいるでしょう。実際、彼らが残した言葉を読んでも、実に共感するものばかりです。しかし、そこにはロータリー財団的な人道主義や奉仕思想は読みとれません。こうしたことも、ロータリー財団になじめないロータリアンが多い理由の1つかも知れません。

しかし、ロータリアンである以上、ロータリー財団に対する理解・協力も責務の1つです。それだけに、本日のロータリー財団月間例会で大いに勉強したいところです。私も、今回の会長スピーチを契機にロータリー財団のことを勉強しなおし、安孫子貞夫PGには遠く及びませんが、2度目のマルチプル・ポールハリス・フェローになろうと思っています。

物事は何であれ、それを理解し、その上で共感できれば、誰もが立場や身の丈に応じて進んで協力するのではないのでしょうか。皆様は、如何お考えでしょうか？

平成 21 年 (2009 年) 11 月 19 日

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

19. 人を学ぶ

本日は、大江 RC 会長の藤野和男さんを迎えてのゲストスピーチ例会です。「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマに、お話しいただきます。ご存知の方も多いと思いますが、藤野さんの職業分類は、建築デザインです。

実は、私と藤野さんとは因縁浅からぬ仲で、お互い、ロータリアンになる前からの付き合いです。実は、鈴木眼科の建築設計も、また自宅の建築設計も彼のお世話になりました。当院の一泊忘年会も今年で 17 回目ですが、第 1 回からずっと参加していただいております。それもこれも、藤野さんの職業人としての実力、そして温かいお人柄に魅せられたからに他なりません。

本年度、我々二人が互いのロータリークラブで会長を拝命したことも、神様の思し召しのような気がします。

さて、私は寒河江 RC に入会させていただいて、もうじき 16 年になります。

大先輩ばかりを前にして失礼かも知れませんが、気心の知れた、そして心から敬愛する友人に恵まれた私は、本当に幸せ者です。

「この人に会えて良かった」

「こういう人になりたい」

「尊敬するあの人が笑われないように頑張ろう」

そういう手本とも言うべき人が身の回りに沢山いるということは、これ以上ない自らの成長の糧だと思っているからです。

例えば、寒河江 RC にいらっしゃる

明るく温厚で慎み深く、誠実で礼儀正しい人

親切で感謝の心に満ち、誰からも慕われている人

困っている者がいれば助け、弱い立場の者をいたわり、道に外れたことを嫌う人

責任感が強く、情熱と志に燃え、人のために労苦を厭わない人

そんな皆さんの人柄や生き方に啓発され、恥ずかしくない自分でありたいと我が身を律してきたからこそ、今の私があるような気がしてなりません。

それだけに、寒河江RCの会員全員、一人一人の素晴らしさについて、私は詳細に語る自信があります。

例えば、私の年度でクラブ幹事を引き受けてくださった奥山吉一さんについて語れと言われても、井田辰男さんについて語れと言われても、早坂源重さん、木村仁一郎さん、そして本日のゲストの藤野和男さんについても、私は彼らの素晴らしい人柄やエピソードを、1時間でも2時間でも語る自信があります。

思い起こせば高校時代、恩師から言われた言葉があります。

「性格というものは、頑張っても自分では変えることは難しい。しかし、人との出会いによって変わっていく。だから、人は成長するのです。」

当時は、あまりピンときませんでした。しかし、この年になってみると、しみじみそう思います。

最後に一。ロータリーでは「親睦」の大切さが強調されます。ロータリーという志を共にする者同士が、互いに語り合い、好意と友情を深め合い、自己改善を図り、奉仕の心を育て高める場が「親睦」です。当然、そういう中で生まれてくる感情は、相手に対する「敬愛」であり、「感謝」でしょう。

私は心の中で、「親睦」という言葉を「敬愛と感謝」という言葉に読み換えています。寒河江RCの会長をさせていただいて、益々そう思うようになりました。

「人は、人から学び人となる」という言葉がありますが、その根本は「敬愛と感謝」ではないでしょうか。こんな私も、皆さんのおかげで成長し、少しは人らしくなったような気がします。只々、感謝の一言です。ご清聴、有難うございました。

会長スピーチ

鈴木 一作

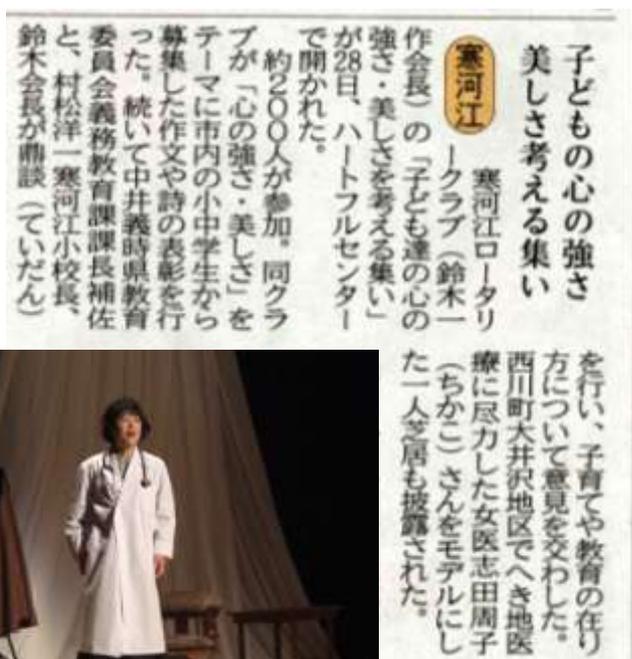
20. 寒河江RCの心意気と実力



いよいよ、寒河江RCの社会奉仕事業「子ども達の心の強さ・美しさを考える集い」が始まります。社会奉仕委員会をはじめ、会員の皆様の御協力と友情のおかげで、この日を迎えられました。本当に有難うございました。

本日は来賓もいらっしゃいますし、朗読・表彰の子ども達も大勢来ます。それだけに、「第一部」の朗読・表彰式は手ぬかりなく、整然と、しかも立派で感動的な式典となるよう、皆様のお力添えを宜しくお願いします。ステージに立った子ども達にとって一生の思い出となるよう、そして心を強く、美しく生きていく今後の励みとなるよう、素晴らしい式典にしてあげたいのです。

もちろん、寒河江RCの心意気と実力を市民の皆様にも見ていただく絶好の機会でもあります。終了後、今宵は、事業の成功を祝い、皆で大いに飲み明かしましょう。



平成 21 年（2009 年）12 月 3 日

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

21. 立派な人が増える社会に

本日は、山形新聞の寒河江支社長、青塚晃さんを迎えてのゲストスピーチ例会です。「活字の力を信じて」をテーマに、お話しいただきます。

さて、覚えている方もいらっしゃると思いますが、昨年 3 月に JR 岡山駅で、38 歳の県職員がホームから突き落とされ、電車に轢かれて死亡するという事件がありました。

犯人は 18 歳の少年で、

「家を離れたかった、人を殺せば刑務所に行ける、殺すのは誰でもよかった」などと供述したそうです。

これは半年以上も前の事件ですが、今でも私の記憶に強く残っているのは、次の二つの理由からです。

一つは、犯人の父親が、犯行当日、記者会見に応じて遺族に対して謝罪したからです。父親は 56 歳で、息子と一緒に今後ずっと償っていくことを、その場で言明していました。

こうした少年事件で、加害少年の父親が、しかも犯行当日の記者会見できちんと謝罪する姿を、私は見た覚えがありません。その誠実さ、責任感、正義感、そして勇気に、私も子を持つ親の一人として胸が熱くなりました。

その一方で、そういう父親に敬意を払うどころか、半ば悪人を「吊るし上げ」しているかのようなマスコミ記者達の横柄な態度に、私は無性に腹が立ちました。

もう一つの理由は、取材に応じた被害者の父親の言葉です。70 歳前後の父親でしたが、事件を知って、「妻と幼い子供、そして父親である私を残して殺された息子のことを思うと、ハラワタが煮えくりかえるくらい犯人が憎い」と述べていました。もちろん、それは当然でしょう。

ところが、この言葉には続きがあったのです。すなわち、

**「でも、犯人はまだ高校生と聞いた。罪をきちんと償い、生まれ変わって欲しい。
そして、人の役に立つ人間になって欲しい。」**

と、涙を流しながら呟いたのです。

その老父の立派な姿に涙が止まらなくなった私は、思わず自問自答しました。

「自分には、言えるだろうか。果たして、そう思えるだろうか。」

この「続きのセリフ」を伝えたニュース番組は、午後 10 時からの報道ステーションでした。そのセリフを聞いていた司会の古館一郎は、何らコメントもせず無言でした。さすがの彼も、恐らく感動のあまり、言葉に詰まったのだと思います。

しかし、他のニュース番組では、私が見た限り、この「続きのセリフ」は報道されませんでした。気になった私は、ネット配信されているマスコミ各社のニュースや、翌日の新聞各紙も調べましたが、被害者の老父の言葉については、「ハラワタが煮えくりかえるくらい、犯人が憎い」としか書かれていませんでした。

何故、マスコミ各社は加害者の父親の真摯な態度に敬意を払うことなく、むしろ吊るし上げるかのような取材をするのでしょうか？

そして何故、被害者の父親の立派な発言を、敢えて削除・無視したのでしょうか？

遺族感情をことさら誇張するまでもなく、犯罪を憎む社会は既にできているではありませんか。むしろ今大切なのは、立派な人が少しでも増える社会にしていけることではないのでしょうか？

最後に、中学時代の恩師の口癖を紹介して、会長挨拶を締めくくります。

「我が子への最大の遺産は、親の美しい生き方である。

なぜなら、心の美しい親なら、心の美しい子どもが育つからです。

そして、心の美しい人間が、美しい社会を作るからです。」

皆様は、如何お考えでしょうか？

22. 年次総会に関連した問題点

本日は、寒河江RCの年次総会です。寒河江RC細則によれば、第5条・第1節に

**「本クラブの年次総会は毎年 12 月の第2例会に開催されるものとする。そして
この年次総会において次年度の役員および理事の選挙を行わなければならない。」**

とあります。

今日の会長挨拶は、この年次総会に関連する、これまでも会員間にしばしば見られた『誤解』についてお話しをさせていただきます。

最初に、理事役員指名委員についてです。クラブ細則の第3条・第1節には、

**「会長の指名する5名の指名委員と現会長エレクトによって指名委員会を組織し、
理事役員候補者を指名するものとする。」**

とあります。

ところが、会長が理事役員指名委員を指名する際、そこに現会長エレクトが含まれていないことを問題にする方がいますが、それは間違いです。なぜなら、エレクトは初めから指名委員会の一員としてクラブ細則で規定されており、会長にはエレクト以外の他の指名委員5名を指名する権限しかないからです。したがって、指名委員会の委員は6名(5+1)です。

次に、その指名委員会が指名する理事役員候補者についてです。実際、この会長スピーチの後、指名委員会から報告があるはずですから、間違いのないように再確認しておいてください。

クラブ細則の第3条・第1節には、

「会長(次々年度)、副会長(2名)、幹事、会計および6名の理事を指名」

とあります。

すなわち、合計11名(1+2+1+1+6)の理事役員候補者を指名します。また、細則の第3条・第2節には、

**「選挙された役員および理事に直前会長を加えて理事会を構成するものとする。
選挙によって決定した理事エレクトは、1週間以内に会合してクラブ会員の中から
会場監督を務める者を選任しなければならない。」**

とあります。

つまり、直前会長は初めから理事会の一員として規定されていて、会場監督のS A Aは最初の理事会で選任されます。言い換えれば、直前会長とS A Aは、年次総会で選挙される理事役員の候補者 11 名とは別枠だということです。この点も、しばしば誤解されていたような気がします。

次に、次々年度会長についてです。細則の第3条・第1節には、

「前記の投票によって選挙された会長候補は、会長ノミニーとなるものとし、その選挙の後の次の7月1日に始まる年度に、会長ノミニーのまま理事会のメンバーを務め、理事会のメンバーを務めた年度直後の7月1日に、会長に就任するものとする。会長ノミニーは、後任者の選挙が行われた後に会長エレクトの役職名が与えられるものとする。」

とあります。

要するに、指名委員会から指名された時点では次々年度会長候補ですが、年次総会で選挙されて以降は会長ノミニーとなります。そして、翌年の年次総会で後任の会長ノミニーが選ばれてから、はじめて会長エレクトになるわけです。

次年度会長の早坂源重さんを例にとれば、本日の選挙直前までは会長ノミニー、選挙後からは会長エレクト、そして来年の7月1日から会長となるわけです。言い換えれば、本日の今の時点では会長ノミニーは早坂さんで、会長エレクトはいないということです。

ここまで述べると、会長ノミニーという言葉そのものが、現実には使われていないということに誰もが気づかれたと思います。さらに、細則自体にも矛盾があることに気がついた方もいるかも知れません。例えば

「会長の指名する5名の指名委員と現会長エレクトによって指名委員会を組織し、」
とありますが、指名委員会が組織される時点では会長エレクトは存在しないのです。

本日は、こうした寒河江RCの現実や細則についての問題点を指摘するに留めます。今後、クラブ細則の是正に向けて検討すべきかどうか、皆さんの御意見は如何でしょうか？

最後に、細則の第5条・第3節に

「年次総会は会員総数の3分の1をもって定足数とする。」

とあります。

本日の出席会員数は現時点で 33 名、既に会員総数 53 名の3分の1を超えています。ここに本日の年次総会が成立していることを宣言して、会長挨拶を終わります。

23. 少年のような心

本日は、会員スピーチ例会です。「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマに、会員の佐藤宏利さん、大沼幸己さんから、お話しいただきます。

さて、11 月末の社会奉仕事業「子ども達の心の強さ・美しさを考える集い」の終了後、ひとり芝居「真知子」のスタッフ4名と寒河江RC会員との合同懇親会があり、大いに盛り上がりました。

その翌日、ひとり芝居の主演をされた今田裕美子さんから御礼の電話がありました。その中で彼女は、我々のことを「少年のような心を持った素敵な大人の集まりなんですね」とおっしゃいました。なるほど、寒河江RC会員一人一人のことを思い浮かべると、確かにその通りだな～と思います。

少年時代を振り返れば、純真無垢な少年達が集まると、お互いが楽しく充実した時間を共有することを何よりの喜びとします。ルールを作るにしても、それは皆が楽しく充実した時間を過ごせるためのルールに過ぎません。周囲の大人から誉められると嬉しくなって有頂天になり、逆に叱られるとしょげたり、ナニクソと思ったりします。そういう中で、少年は組織や集団を学び、自分達を磨き合い、社会に貢献する大人になっていくのでしょうか。

一方、ロータリークラブは地域の企業トップクラスの集まりですが、ロータリー活動そのものは、互いの企業経営や企業利益に直接つながるものではありません。むしろ、互いの親睦を深め合いながら、世のため人のために尽くし、よりよい社会を目指す、そして自らの人間性を高めていく活動をしています。言い換えれば、人としての「純真さ、生きる喜び、生きる価値」が、我々のロータリー活動の真髄にあるように思えてなりません。

Paul P Harris は、著書「My Road to Rotary」の中で

**「ロータリークラブがメンバーをより良き人間へと導いていく道の一つは、
心の中に宿る“少年”を失わせないこと、蘇らせることなのです。」**

と述べています。

実際、私が敬愛するロータリアンである皆様は、

「仕事や経営に緊張と多忙の日々を過ごす中、ロータリーでは気を許し合った仲間と奉仕を語り、人生を語る。知恵と汗と時間と多少のお金を出し合い、様々な奉仕に夢中で取り組む。なにより、そんな仲間との時間を楽しいと思う。」

そんな少年のような純真な心の持ち主ばかりだと、私は思っています。もちろん、寒河江RCに女性会員がいれば、少年少女のような・・・と言わなくてはなりません。

それだけに、企業代表者として新しく寒河江RCに入会した会員は、こうしたロータリークラブの姿に最初は面食らうかも知れません。実際、入会当初、「企業経営のノウハウが得られるわけでもない、企業利益につながるわけでもない」と、不満を感じた人もいたのではないのでしょうか？

私は寒河江RCに約17年在籍させていただき、最近ようやく実感として分かってきたことがあります。それは、

ロータリークラブは目先の企業経営や企業利益などを超えた、目指すべき経営者、目指すべき社会人、目指すべき人生を、知らず知らずのうちに会得していく不思議な組織であるということ。そして、そのためには、なんと云っても「少年のような心」が大切であるということを一。

皆様は、如何お考えでしょう？



平成 21 年 (2009 年) 12 月 24 日

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

24. 好意と友情で

12 月はロータリー家族月間、そして本日は待ちに待った「歳忘れ家族会」です。クラブ奉仕および地域社会奉仕委員会による準備とお力添えで、かくも盛大な家族会を開けたことを、会長として大変嬉しく思います。

さて、既に御案内のように、幹事の奥山吉一君の御尊父が急逝し、明日がその葬儀です。会長幹事と言えば、夫婦も同然。連れ添いの御父上がお亡くなりになれば、ともに悲しみ、喪に服するのは当然です。

実は、今回の年忘れ家族例会については、私なりに 3 つのテーマを考えておりました。それは「上半期を振り返る」、「大いに楽しみ騒ぐ」、「親睦を深め合う」の 3 つです。

そのために準備してきた本日の出し物は、寒河江 RC の今年度上半期事業の歩みをまとめた DVD 上映、理事役員総出の寸劇、さらに会長幹事と理事役員有志によるダンスの披露の 3 つでした。

しかし、葬儀を明日に控え、私は「大いに楽しみ騒ぐ」気持にはなれません。それは、皆様も同様でしょう。ロータリー家族とは、まさにそういうものだと思います。

そこで理事役員と相談の結果、寸劇とダンスは中止と致したく存じます。その分、この数日間、私は上半期の事業をまとめた DVD 作りに没頭しました。会長の熱い心、それを支える幹事のひたむきな誠実さ、それに応えてくれた理事役員の心意気と情熱、そして何よりも皆様の友情を、私はその DVD に込めたつもりです。

「大いに楽しみ騒ぐ」ことは控えつつ、「上半期を振り返り、親睦を深め合う歳忘れ家族会」一。本日は、皆様の好意と友情で、そういう一夜にさせていただければ幸いです。

<今年の寒河江 RC 会員の表彰・受賞>

- ・安孫子貞夫：寒河江市表彰
- ・大沼保義：山形県教育功労賞
- ・鈴木一作：紺綬褒章、寒河江市感謝状
- ・大竹 正：小さな親切実行章
- ・小野承信：優良保護司表彰
- ・早坂源重：優良保護司表彰

(敬称略)

平成 22 年（2010 年）1 月 7 日

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

25. 年度下半期に向けて

新年、あけましておめでとうございます。昨年同様、今年も宜しくお願い申し上げます。

本日は、会員スピーチ例会です。「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマに、会員で会長エレクトの早坂源重さんから、思いのたけをお話しいただきます。

さて、年度上半期は、それこそ「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」という思いで、理事役員そして皆様の多大な御協力をいただきながら、各種事業を精一杯やってきました。どれも内外から御好評をいただき、事業の意義に沿った素晴らしい結果を残せたのではないかと感じているところです。

これから年度下半期に入るわけですが、「温故知新、温故創新」というテーマを旨とし、確かな伝統の上に新しい寒河江RCを目指しながら、100周年に向かう基盤となるような1年だったと言われるよう、頑張っていきたいと存じます。

そのためには、1つは次回のクラブ・アッセンブリで皆様のお智恵をお借りしながら、下半期に向けて、これまでの寒河江RCの何を大切に、何を新しくしていくかを、理念、手法ともども、会員間で確認・共有し合い、かつ確固としたものにしていくことだと思っています。

もう1つは、次年度の応援です。今から1年前、私の年度の理事役員がそろい、以後、理事会で色々と相談や準備ができるようになり、幹事ともども実にほっとしたことを覚えています。これから、次の早坂年度の計画や準備が本格的に始まるわけですが、3月くらいに大半の準備が終わっていないと上手くいかない事業もあるかと思えます。そういう意味では、お手伝いすべきこと、橋渡しをするべきことなど、次年度の予定事業についても抜かりなく応援していきたいと存じます。

最後に。下半期の大きな事業として、IM、台湾斗南友情交換の派遣事業、さらに社会奉仕フォーラム、国際奉仕フォーラムなどがあります。どれも、さすが寒河江RCと言ってもらえるよう、理事役員と智恵と汗を出しながら一致協力して頑張っていきたいと思いますので、皆様のお力添えを宜しくお願い申し上げます。

26. 佐藤豊彦ガバナーのメッセージ



本日は、下半期最初のクラブ・アッセンブリです。今年度の重点事業も、皆様のお力添えで十分な成果を出しながら、滞りなく実施してまいりました。それらの反省も含め、年度後半の事業計画について、皆様から御智恵をお借りしながら、十分検討していただければ幸いです。

さて、敬愛する佐藤豊彦ガバナーから、新年のメッセージをいただきました。ここで、皆様にご紹介申し上げます。

「新年明けましておめでとうございます。健やかに新しい年をお迎えのことお慶び申し上げます。昨年は公式訪問、そして地区大会とご協力を賜り、満足した半年を過ごさせていただきました。残る半年も、皆様方よりなお一層のご理解をご協力をいただきまして、充実した年度を全うしながら次の塚原年度にバトンタッチが出来るよう、鋭意努力する所存でございます。特に、これからの年度後半では、年度前半で学んだことを行動に移さなければならないと感じているところです。

その一つが、WCS（世界社会奉仕）における支援活動です。前回のガバナー月信でご報告済みですが、12月に視察でネパールへ行って参りました。ネパールは、我が国から見ると、大変遅れていることを痛感して参りました。ネパールに対しては、2002年の山形西RCによる「小学校の校舎改築プロジェクト」に始まり、地区としても「病院の井戸堀削事業」に援助しております。今回の現地視察で、豊富な井戸水利用が可能になったことに感謝をされ、さらなる支援をしたいとの思いを強く持ちました。今後とも、世界社会奉仕委員長と検討しながら、新たな奉仕活動を実施して参りたいと考えております。

さて、「ロータリーの友」12月号に掲載されていた「小児がんや難病と闘う子どもたちの希望の灯へ」と題した“そらぷちキッズキャンプ”支援の記事（第2510地区）を、皆様もご覧になられたと思います。小児がんや心臓疾患など、難病と闘っている全国の子供達に、私達も何かお手伝いが出来ればと思います。第2510地区の渡辺ガバナーからも、強い協力要請をいただいております。ドラッグストアに置かれている募金箱から、リトルドロップの輪を広げることが可能です。私も早速、正月3日にツルハドラッグ・ストアで寄付を行って参りました。是非、皆様方からもお力添えをいただきますよう、お願い申し上げます。末筆ながら、貴クラブの益々のご発展をお祈り申し上げます。（ガバナー 佐藤豊彦）

27. IM を考える

1 月は、ロータリー理解月間です。そこで本日は、来月の第 4 ブロック IM の準備例会とし、IM についてお話しさせていただきます。

IM とは、Intercity Meeting (インターシティー・ミーティング) の頭文字で、近隣都市の複数のクラブで実施する「都市連合会」または「クラブ連合会」のことを指します。

元々は、1950 年代に RI が推奨したロータリー情報・教育のためのプログラムで、Intercity and Club General Forums (ICGF) と呼ばれていましたが、1984 年より呼称が IM に変更されました。

なお、現在は RI からの開催推奨はありませんが、全国的には、今でも IM という呼称のまま様々な形式で実施されています。例えば、ホストクラブ主催 (企画運営) による数クラブ合同例会という形式を採用している地区もあります。

IM の目的は、近隣クラブ会員同士の「親睦」と「学び」です。具体的には、

近隣都市の複数のクラブにおける会員相互の親睦を通じて面識を広め、

「ロータリーの目的」に関係する内容を会員同士が探求・討論し合うことに

よって得られるロータリー情報を通じて、立派なロータリアンを養成すること

です。

したがって、IM のテーマは、あくまで「ロータリーの目的」に関する、または繋がるような内容であり、かつ、そこでの探求・討論が会員にとってロータリー情報となる必要があります。

IM の形式については、「基調講演のみ」、「討論会のみ」、「基調講演および討論会の組み合わせ」、または「パネル・ディスカッションおよび会場を交えての討論会の組み合わせ」など様々ですが、本来は、「自由討論」がプログラムに組み込まれていることが原則です。なぜなら、近隣都市のロータリアン同士が胸襟を開き、互いの考えや気持を交わし合い、「友情と敬愛」の念を抱くようになる連帯意識 (親睦) が IM の狙いの一つであり、大きな成果だからです。もちろん、討論後の決議や決定はありません。

IM では、懇親会も開催されることが一般的です。近隣都市の複数のクラブ会員が集まるわけですから、討論を通じて得られた「友情と敬愛」をさらに深めるためにも、懇親の時間は大切です。

IMの主催者については、しばしば議論の対象になるようです。実は、ICGFの時代から、IMの主催者（IMリーダー）はガバナーでした。最近では、ガバナーの指示・要請のもと、ガバナー補佐（または、経験豊かなロータリアン）がIMの企画運営を担うことになっています。

2800 地区では、ガバナーがIMの主催者で、その指示・要請のもと、ガバナー補佐がIM企画運営の責任者となり、ホストクラブの経験豊かなロータリアン（IM実行委員長）が実際の企画運営を担うという方式が多いようです。今回の第4ブロックIMも、この方式で行います。

先ほども述べたように、現在、IMはRIが開催推奨するプログラムではありません。したがって、IMを実施するとすれば、その主催権限があるのはガバナーまたはクラブ（近隣クラブの代表）のいずれかであって、少なくとも（ガバナーの補佐・代理としての任務が明確に規定されている）ガバナー補佐ではありません。すなわち、ガバナー補佐は、主催者から企画運営を任されるという立場です。当然、IMの具体的内容については、主催者の了解が必要です。

2800 地区では、ガバナーがIMを主催することになっています。したがって、開会と閉会の点鐘はガバナー（ガバナーが欠席の場合は、企画運営責任者のガバナー補佐）が行います。この場合、IMの招集者は、ガバナーとガバナー補佐の連名です。

しばしば、IMの会場でガバナーが来賓として紹介される光景を目にしますが、主催者は来賓ではないので正しくはありません。また、IMの終盤で、ガバナーに「講評」を求められることがあります。これも正しいとは言えません。自分が主催したものを、自分で講評しては笑われます。あくまで（「講評」ではなく）「総括」として、最後に主催者であるガバナーが話をするとするのが本来の在り方です。

この場合、ガバナーによる「総括」の前に、企画運営者であるガバナー補佐が「所感」を述べることは、なんら問題ありません。もちろん、ガバナーが欠席の場合は、ガバナー補佐が「総括」をします。

以上、こまごまと話しましたが、頭の中でIMに関する再整理ができましたでしょうか？

来月開催予定の第4ブロックIMは、職業奉仕をテーマにしています。そして、「基調講演 → パネル・ディスカッション → 会場を交えての討論会 → 懇親会」という流れで行う予定です。また、当日、佐藤豊彦ガバナーは欠席されるので、企画運営責任者の佐藤栄一ガバナー補佐がIMリーダーとして点鐘、総括を行い、IM実行委員長の小野承信さんがIM全般を取り仕切ります。

最後に。ホストクラブである寒河江RCが、会員全員一丸となってIMの成功を確たるものとしてくださることを確信して、会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。

28. もう一つの日本

本日は、寒河江さくらんぼRC会長の佐藤功二さんをお迎えし、「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマにお話しいただき、ゲストスピーチ例会です。

さて、皆さんは、「山の向こうに、もう一つの日本がある」という言葉を聞いたことがあると思います。

これは、昭和 36 年から 41 年 (1961~66 年) 当時のアメリカ駐日大使で、今は亡きライシャワー博士 (エドウィン・オールドファザー・ライシャワー) の言葉です。

彼は、東京生まれの東京育ち。日本人女性を妻とし、松尾芭蕉の句で有名な山寺 (立石寺) の開祖「慈覚大師・円仁」の研究でも知られる親日家です。

有名な逸話として、第二次世界大戦中、アメリカ陸軍参謀部少佐だった彼は、数々の名所、旧跡を持つ京都を日本主要都市の爆撃リストから外すよう、上司へ涙ながらに訴えたという話が残っています。

第二次世界大戦後、ハーバード大学で教鞭をとっていた彼は、ジョン・F・ケネディ大統領の要請で、アメリカ駐日大使として日本に赴任してきました。「日本生まれのアメリカ大使」として日本国民から親しまれ、その後の「日米パートナーシップ路線」を築き上げた功労者の一人でもあります。



その彼が言う 『もう一つの日本』 とは、「本来の日本、素晴らしい日本、尊敬すべき日本」という意味であり、それは我らが郷土、山形県を指して述べた言葉です。

すなわち、自然風土に恵まれた山形を、そして親切で慎み深く心豊かな県民性を、彼はこよなく愛していたのです。

このライシャワー博士の言葉は、昭和63年（1988年）に山形の市民団体「風」（田中裕子代表）の依頼に応じ、当時、アメリカに在住していた彼が山形の英文誌「YAMAGATA」に寄稿した『山形一山の向こうのもう一つの日本』にあるものです。

山寺芭蕉記念館の敷地に全文を記した記念碑があり、私も東京から友人が来ると必ず案内する場所の1つです。そして、その記念碑の最後にある次の一節を読む度に、私は胸がつまる思いにかられます。すなわち、

「しかし、私は強く言いたいのです。山形を良い例として『もう一つの日本』を見落としてはならないと。将来においても自然と人間が健全なバランスをとっている、そのような『もう一つの日本』に日本全体がなることを望みます。」

残念ながら今の日本は、このライシャワー博士の望みとは正反対の方向に向かっているような気がしてなりません。しかし、だからこそなおさら、山形県は「もう一つの日本」として在り続けて欲しいと思うのです。皆様は、如何お考えでしょう？



RID2800 2009-10年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

29. I M 歓迎の言葉

本日は寒さ厳しき折にもかかわらず、寒河江で開催される運びとなった 2800 地区第4ブロックの I M に、皆様ようこそおいでくださいました。寒河江 RC 会員一同、心より歓迎を申し上げます。

寒河江 RC は、昨年 6 月に創立 50 周年記念式典を行い、この 50 年の歩みについて皆様から高い評価をいただきました。今年度は 100 周年に向けての新たなる旅立ちという思いで、会員一同、「温故知新、温故創新」を合言葉に、日夜ロータリー活動に励んでまいりました。そのような年に、当地で第4ブロック I M を開催できますことは、大変光栄であり、会員一同心より喜んでいくところです。



Rotary Information の My friend によれば、I M とは

「Intercity Meeting または Inter Club Meeting の略称で、複数の都市のクラブで実施する都市連合会またはクラブ連合会」

と書かれています。

そして、I M の目的については、

「参加会員にロータリー情報を伝えるとともに、会員相互の親睦と面識を広めること」とあります。

今年度、佐藤豊彦ガバナーは職業奉仕に関するロータリー情報を重視され、「忘れてはならない**職業奉仕**」というスローガンを打ち出されました。それを受けて、今回のIMは、「**我が半生と仕事、ロータリー**」をテーマに掲げ、人生と職業奉仕について互いに考え、大いに語り合う場となるよう、関係者一同、計画・準備を進めてきたところです。

もちろん、友情を深め、親睦の交わりの中でロータリー精神を大いに語り合っただけのよう、盛大な懇親会も準備しております。

最後にー。寒河江ロータリークラブ会員一同、皆様の益々の御活躍を心からお祈りしながら、歓迎の言葉といたします。



30. 色々ある国際奉仕

今月は世界理解月間で、本日は国際奉仕フォーラムです。「国際奉仕を考える」というテーマで、会員の古澤康太郎さんと佐藤敏さんから基調講演をしていただき、その後、テーブル・ディスカッションをお願いします。

先日、私は国際結婚をした西村山郡在住の外国人妻の集まりに参加しました。外国人妻とその家族が集まって、お国自慢の料理をふるまい、お国の踊りを披露し合うという内容でした。もちろん、そうした集まりの主たる目的は、境遇が同じ者同士、互いの親睦や絆を深めることでしょう。

10年近く続けてきた活動と聞きましたが、この度、彼女らは「国際平和まつり」というNPO法人を立ち上げました。それは、仲間同士の集まりだけで終わるのではなく、広く市民とも交流したいという思いからだそうです。

聞けば、既に老人施設や児童養護施設にも訪問交流をしているそうです。外国人妻らがNPOを組織するには並々ならぬ苦労があったと思いますし、その志と覚悟には本当に頭が下がりました。

今回は、そのNPO法人の代表で韓国出身の奥様からお招きを受けて参加して来たのですが、実は、その集まりで、子供達に絵本の読み語りをしてあげて欲しいという依頼があったのです。もちろん、他にも一般市民が招待されていましたが、「寒河江RCの人が来てくれて、とても嬉しい」と何度も言われました。しかも突然の指名で、私はジュースで乾杯の音頭をとらされる羽目になりました。



就任して間もない鳩山総理は、障害者を積極的に雇用しているチョーク製造工場を視察したそうです。新聞には、その社長の言葉として、次のような内容が紹介されていました。

「幸福とは、人に愛されること一、
人に褒められること一、
人の役に立つこと一、
人に必要とされること一」

それは、今年度の寒河江RCのスローガンの1つ、「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」と相通じるものでしょう。そして、それはNPO法人「国際平和まつり」の切なる願いでもあるのです。

その「国際平和まつり」の集まりで、子供達のあどけない嬉しそうな顔を見ていると、

“子供達は、母親が外国人ということで、辛い思いをしたこともあるのだろう”
“それでも、寒河江を、そして山形を担っていく子供達なんだ”
“将来、母親の母国との親善にも役立つ人になって欲しい”

など、色々な想いが私の脳裏をよぎりました。

留学生の交換事業は、ロータリークラブだからこそできる立派な国際奉仕活動です。世界に貢献するWCS事業、さらには米山奨学生や財団奨学生の支援も、素晴らしい国際奉仕活動でしょう。

しかし、身近な地域でもできる、いや身近だからこそ普段から実践すべき国際奉仕活動もあるように思います。「いや、そういう活動は社会奉仕だよ」と主張される人もいるでしょうが、奉仕を色分けして何か意味があるのでしょうか。

国際化してきた日本であればこそ、国際奉仕であり、社会奉仕でもある活動ができるのです。それは、奉仕の理想を掲げる我々ロータリアンとしては、むしろ本望なのではないでしょうか。

「国際奉仕を考える」と題した本日の国際奉仕フォーラムでは、そうした点についても話し合っただけならばと存じます。ご清聴、有難うございました。



31. 尊敬できる大人

本日は、ゲストスピーチ例会です。最初に、本日のゲストスピーチにお招きした寒河江小学校で校長をされている村松洋一先生をご紹介いたします。ようこそ、お出でくださいました。

さて、私の中学時代の恩師、大川厚之先生は教育基本法・第1条（教育の目的）が好きでした。先生は、この条文を毎学期の最初の授業で読み上げた後、次のように生徒に語りかけてくれました。

**「難しい言葉が並んでいるけどね。要するに、
家庭を築き、地域を担い、人として生きていく上で何が大切かを学び、
それらを身につけることが教育の目的だと書いてあるんだよ。」**

そして先生は、「だから勉強も大切だけど」と言いつつ、こう続けました。

**「嬉しかったこと、悲しかったこと、褒められたこと、叱られたこと、
恥ずかしかったこと、怒ったこと、悔しかったこと、頑張ったこと、
感謝したこと、そして感謝されたこと一。そういうことを通じて、
生きていく上で何が大切かをしっかり考え、きちんと身につけていく。
そのために学校があり、家庭や社会があるんだよ。」**

また、先生は『誠実・責任・勇気』という言葉も好きでした。それは教室の黒板の上に掲げられた、我々のクラス目標でもありました。そして毎朝のホームルームでは、必ずこれらの言葉を話題にされたのです。

**「新聞にこういう記事があったね。
それこそ、責任ある大人の姿だと思います。」**

また、クラスで揉め事があると、必ずこれらの言葉で叱ってくれました。

**「そういうのが君の勇気か。
誠実な人間なら、どうすれば良いと思う？」**

もちろん、クラスで嬉しいことがあった時も、同じ言葉で喜んでくれました。

**「君は、本当に誠実な人だね。」
「よくぞ責任を果たしてくれた。」
「先生は、君の勇気を一生忘れない。」**

おかげで我々生徒は、『誠実・責任・勇気』を常に意識して学校生活を過ごしました。それらは「教育の目的」と共に、今でも私の心に生きています。

最近、心の教育が叫ばれていますが、尊敬できる大人が身近にいさえすれば、子どもの心は自然と育つのではないのでしょうか。だからこそ、「自らの思いを、自らの態度と言葉で示し、子供達の心に響くように伝える大人」が必要だと思うのです。

そういう意味では、今の子供達は可哀相な気がします。皆様は、如何お考えでしょう？

(旧) 教育基本法・第1条(教育の目的)

教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

(平成18年に教育基本法は改正されました。上記は、私が中学時代に教わった旧法の条文です。)

RID2800 2009-10年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

32. 丁寧さと誠実さ

本日は、寒河江市広報統計係長の木村幸一さんを迎えてのゲストスピーチ例会です。「広報紙作りから見た寒河江」をテーマに、お話しいただきます。

さて、皆さんは伊集院静という人物を御存知でしょうか？

伊集院静といえば、我々の世代では夏目雅子の元夫というイメージが強く残っていて、当然、憎たらしい奴であります。ちなみに、今は篠ひろ子の夫であり、むしろこちらの方を不屈き千万と憤慨する先輩もいらっしゃるかも知れません。



彼は、若い頃から数多くのファッションショーやコンサートの演出をはじめ、マッチの歌「ギンギラギンにさりげなく」や「愚か者」などの作詞も手がけています。また、その後も小説やエッセイを書くなどのマルチタレントで、確か幾つかの文学賞も受けていたと思います。

しかし、憎たらしい伊集院静の小説やエッセイなど、へそ曲がりの私はこれまで表紙を目にすることはあっても、中身まで目を通したことはありませんでした。

さて、数年前から月に1～2回、会議その他で東京へ出張します。いきおい、新幹線の車中での読書が「お気に入りの時間」となっています。

そんな時、ふと目にしたのが「トランヴェール」一。すなわち、新幹線の座席の所に置いてあるJRの広報誌です。

その巻頭には、毎月、「車窓に揺れる記憶」と題したエッセイが連載されています。初めは、それが伊集院静の作品とは知らずに読んでいたのですが、哀愁漂う文体、物事の本質に静かに迫っていく手法、そして韓国在日2世なのに日本人よりも日本らしい彼の感性に、私はいつしか魅せられてしまいました。

皆さんも、新幹線で東京へ出かける折など、退屈しのぎに読んでみてはいかがでしょうか。毎号、心にしみる内容が書かれています。

2月号は「暖炉の火」という、山形県の少年を描いたエッセイでした。それには、

**「人にとって大切なものが、ここには間違いなくある。仕事の基本は、
丁寧と誠実なのだと思った。・・・あの少年は、元気であるだろうか。」**

と書かれていました。

私も、山形の県民性として第一に挙げたいものは、丁寧さと誠実さです。言うまでもなく、強い敬愛の念を抱いています。

山形県に住む人は、自分の仕事を愛し、そして我が町を愛するが故に、誰もが丁寧さと誠実さを大切にしているような気がします。例えば、寒河江市報を読んでも、私は丁寧さと誠実さを感じます。何よりも、寒河江を愛する心を感じます。

本日は、「広報誌づくりから見た寒河江」というテーマで、寒河江市役所総務課広報統計係長の木村幸一様からお話しをいただきます。今年度の寒河江RCの活動にしても、市報に何度も掲載していただきました。寒河江を愛する心を、それこそ丁寧かつ誠実に語っていただけるものと期待しているところです。

ところで、先ほどの「トランヴェール」ですが、先月、伊集院静のプロフィールの項目を読んでいると、私は愕然としました。1950年生まれ一、すなわち彼は、いつのまにか60歳に達していたのです。

さすがに夏目雅子の一件は、そろそろ許してやってもいいかな・・・と思っています。皆様は、如何お考えでしょう？



(寒河江市報)

33. 自信と愛と志

本日は、寒河江青年会議所理事長の奥山貴大さんを迎えてのゲストスピーチ例会です。「志と自分」をテーマに、お話しいただきます。

さて、あれは小学校の入学直前でした。幼稚園で鉄棒から落ちてしまい、私の右腕は、重度の複雑骨折と神経損傷を負い、数時間にわたる手術を受けました。

小学校入学後は、電車で隣町の病院へ向かい、リハビリ治療を受ける毎日が続きました。もちろん、登校はいつも昼過ぎでした。授業らしい授業も受けられません。しかも右腕は使えないので、書いたり操作したりする作業もできません。当然、すべての教科が不得意で、かつ大嫌いでした。

そんな私を不憫と思っていた両親は、リハビリ治療が終わった3学期、担任の泉浩先生に
「進級しても苦勞するだけだから、1年生をもう一度やらせて欲しい。」
と頼みに行ったそうです。

学年末の終業式の日、私は教室に一人残されました。そして先生から、
「1年間、よく頑張りましたね。」
と言われ、新品のノートを渡されたのです。

ノートの表紙には「2年1組」とあり、私の名前が書かれていました。

私は涙が溢れてきて、思わず
「僕は、2年生になってもいいのですか？」
と尋ねてしまいました。そして、
「僕は字も知らないし、計算も分からないし、運動もできません。」
と続けました。

すると先生は、次のように静かに言ったのです。

**「クラスの皆は、君をばかにしていますか？
君は学芸会で、一寸法師の長い話を上手に語れました。
全校集会の壇上で、校歌を上手に歌えました。
毎日の帰りの時間、クラス目標の暗唱係を1年間やり通しました。
私は君を、強くて立派な子だと思っています。」**

私は、下を向いて黙っていました。その様子をじっと見ていた先生は、突然、私の両肩を抱きかかえ、涙を浮かべて

「君を駄目な子だと、誰が言った！」

と大声で叫びました。

そして耳元で、

「大丈夫一、先生がついている。

来年も君の担任だよ。

怪我也治ったし、これから

字も計算も運動も得意になるよ。」

と囁いたのです。

大人からの価値づけと支えがあればこそ、子どもは希望を持てるのです。そして希望があればこそ、子どもは自信や愛や志を育むことができるのです。そのことを、私は教わったような気がします。

その後、私は少しずつ勉強や運動が好きになり、中学校では学年トップの成績になりました。そして高校入試の合格が決まった翌日、私は泉先生の墓前へ報告に行きました。実は、私が中学2年の時、先生は癌で亡くなっていたのです。

「先生、ありがとうございました。

僕は、先生みたいな人になります。」

これが、今でも私という人間の根本にある言葉です。

本日は、寒河江青年会議所の理事長、奥山貴大さんから、本年度の寒河江RCのテーマの1つ、「自信と愛と志」に相応しいお話を語っていただけるものと期待して、会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。

34. 社会に対する義務と責任

本日は、社会奉仕フォーラムです。「社会奉仕を考える」というテーマで、会員の大沼保義さんと阿部清さんから基調講演をしていただき、その後、テーブル・ディスカッションをお願いします。

いよいよ来週の3月21日から、小学生から大学生を引き連れての台湾斗南RCとの友情交換事業です。私も行ってまいります。公用のために途中で戻らなくてはなりません。怪我や病気などなく、大いに交流し、沢山の思い出を作り、全員が無事に帰国されることを心から望みます。

さて、私が心から敬愛する Guy Gundaker の著書「A Talking Knowledge of Rotary」によれば、ロータリアンの『社会に対する義務と責任』について、次のように書かれています。すなわち、

「ロータリアンがその町・州および国に対して負う義務と責任とを一言にして表わせば、『良き市民たれ』ということになる。自分の住む町に対する市民としての情熱を示す最良の活動は、慈善的・博愛的・公共的その他の団体のメンバーとなることである。」

要するに、ロータリアンはRC以外の地域社会の奉仕団体メンバーとなり、自分の住む町が良くなるように活動しなさいということです。

例えば、スポ少の指導員、ボーイスカウトの隊長、絵本読み語りのメンバー、子ども会の育成委員、保護司や民生委員など、そういうものに積極的に参加・活動することが、ロータリアンの『社会に対する義務と責任』だということになります。

そういう意味では、今回、当クラブの社会奉仕委員会が実施した「個人的に行なっている社会奉仕」の調査は、まさに我々ロータリアン一人一人が『社会に対する義務と責任』を果たしているかを問うたものと言えるでしょう。

一方、クラブとしての活動については、「A Talking Knowledge of Rotary」には次のように書かれています。すなわち、

「火災予防、教育問題、河川および森林保護ならびに、これらに類する公共問題に関しては、各クラブは妥当と信ずる活動をとることが認められねばならない。」

その上で、Guy Gundaker は別の箇所で、

「公共問題へのロータリアンの関心の現れは、ロータリークラブの名を以てする団体行動の形をとるのでなく、どちらかと言えば、個人の活動や公共的団体のメンバーとしての活動の形をとって行なわれる。しかし、肝腎のロータリアンが、この原則を忘れる場合が余りにも多過ぎる。」

と述べています。

実は、上記と同じような記載が決議 23-34 にもあるのです。すなわち、クラブとしての活動について、

「RCは、当該地域社会の住民全体の積極的な支持が得られなければ成功を期待できないような、そして地域社会一般に効果を及ぼすことを目的とする『奉仕の実践活動』を企画・立案・実施しなければならない。」

とあります。

その上で、

「RCの奉仕の実践活動は、RC会員に対して、奉仕の世界における訓練を行なうことを目的として企画された実験例にしか過ぎないのである。したがって、全てのロータリアンの個人奉仕の努力を逐一記録するクラブ活動の方が、(一般的に言えば、クラブの団体行動のみを要求するクラブ活動よりも) ロータリー精神に沿うものである。」

「A Talking Knowledge of Rotary」にしても、また「決議 23-34」にしても、少々分かりづらい言葉で書かれていますが、私としては次のように理解しています。

「ロータリアンは、地域の公共的奉仕団体メンバーを主体とした個人奉仕こそが大切なのであって、それがロータリアンの『社会に対する義務と責任』である。それに対して、ロータリークラブとしての団体奉仕は、個人奉仕だけでは達成できない地域貢献という意味では有意義だが、あくまで個人奉仕の訓練と捉えるべきである。」

皆様は、如何お考えでしょうか？

本日の社会奉仕フォーラムでは、以上のような視点も踏まえながら検討していただけることを期待して、会長挨拶といたします。



22年(2010年)3月28日

RID2800 2009-10年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

35. 仲が良いことの心地良さ

今日は、台湾斗南友情交換例会です。台湾から帰国したばかりの奥山吉一さん、遠藤伸一さんに事業報告をしていただきます。また、事業に参加された児童生徒の皆さんからも、一人一人、感想を述べていただきますので、準備をしておいてください。

さて、私自身、今回の台湾斗南訪問の間、何回かスピーチをさせていただく機会がありました。その際、私は常に二つのことをお話ししました。

一つは、「人生で一番大切なことは健康である」ということ。これは、交流訪問団の誰もが怪我や病気などないことを祈ってのことでした。

もう一つは、「人生で二番目に大切なことは仲良しである」ということ。すなわち、

「夫婦、仲の良いこと一。家族、仲の良いこと一。クラスの、仲間の、職場の、地域の、皆誰しもが仲の良いこと一。仲良くしよう、仲良くしたいという思いこそ、私は社会の礎だと信じています。」

というお話しをしました。

ご存知のように日本と台湾との間には、悲しい一時期がありました。それでも台湾斗南の人達は、「仲良くしよう、仲良くしたい」という思いで我々に接してくれます。

仲が良いというのは、安心なんです、ありがたいのです、そして嬉しいのです。その心地良さを、台湾との交流を通じて子供達に感じて欲しいと思っていました。

その上で、仲良くなるためには、お互いが「仲良くしよう、仲良くしたい」という思いで相手と接することが大切なんだということを、今回の交流訪問で子ども達が学んでくれたとすれば、こんなに嬉しいことはありません。

今後、台湾をはじめ世界の人々と互いに交流を深め合いながら、仲の良い平和な国際社会が訪れんことを祈って、本日の会長挨拶といたします。ご清聴、有難うございました。

36. 命の教育

本日は、ロータリー情報例会です。ロータリー情報・雑誌委員長の船田浩三さんから、「最近のロータリーの友に思うこと」をテーマに、お話しいただきます、

さて、若い夫婦による乳幼児の虐待、青少年による凶悪事件、学校内での陰湿ないじめなど、そういう昨今の状況もあって、「命の教育」の大切さが叫ばれています。

私も「命」に関する講演や授業を頼まれて、しばしば小学校や中学校へ出かけます。その際、目の前の児童生徒らに必ず言っている言葉があります。それは、

「自宅に仏壇がある人は、手を挙げてください！」

すると、山形市内であろうと郡部であろうと、どこの学校でもほとんど全員の生徒が手を挙げてくれます。

そうです。山形県は、ほとんどの家庭に仏壇があるのです。そして毎朝、親や祖父母は仏壇の前にすわり、ご飯を供え、お線香をあげ、合掌し、先祖と言葉を交わしています。

そういう家庭なら、それだけで子供達に立派な「命の教育」をしていると言っても良いでしょう。なぜなら、親や祖父母のそういう姿を子ども達が毎日見ていれば、物心がついた頃には自ら仏壇に向かい、手を合わせる子どもに自然と育つはずで、そして、そういう子どもが人の心や身体を傷つけたり、まして凶悪事件を起こしたりするとは、私には思えないからです。

家の中に仏壇がある国は、世界中で恐らく日本だけではないでしょうか。お盆に家族で墓参りをし、先祖の霊を迎える国も日本だけでしょう。我々日本人は、先祖との関わりの中で生活してきたのです。そういう文化や伝統の背景を説明し、それを日本の誇りとして子ども達に伝えていくことも、大切な「命の教育」だと思います。

だとすれば、学校教育が担うべきは、仏壇の前で毎日合掌する意味や大切さをきちんと教え、

「そういう親や祖父母を、誇りに思っ欲しい。」

と、教師が生徒達へ心をこめて伝えてあげることではないでしょうか。

すなわち、親や祖父母のそういう姿をきちんと価値づけ、教師の立場から補完してあげることこそ、学校教育の役割だと思います。

しかし残念なことに、そういう話を児童生徒にしたことがあるという教師に出会ったことは、これまで一度もありません。

「千の風になって ～天国への手紙」という素晴らしい映画があります。2004年に製作されたものですが、その後も全国各地で自主上映が後を絶ちません。小学生から大人まで、死を考え、生きる意味を考え、誰もが涙する映画だからです。ちなみに、山形県では長井市で自主上映されたきりです、他の地区では上映されていません。

実は半年後、寒河江市で自主上映するために、私の映画仲間が準備を進めています。ぜひ親子で見て欲しいと思っていますので、その時は皆さん、ご協力ください。ご清聴、有難うございました。

参考：映画「千の風になって ～天国への手紙」~~~~~

<解説>

天国へ旅立った大切な人へ向け、自らの想いを綴った手紙を朗読するという地方ラジオ局の番組「天国への手紙」を基に映画化した3話オムニバスの人生ドラマ。脚本・監督は、「君は裸足の神を見たか」で監督デビューした金秀吉。出演者は、西山繭子、伊藤高史、南果歩、水谷妃里、金久美子、吉村実子、綿引勝彦、他。

<ストーリー>

ラジオ番組「天国への手紙」の取材を続ける女性記者・紀子（西山繭子）。そして、小児癌で長男を失った主婦・葉子（南果歩）一、高校時代に母親（桂木梨江）への暴力に走った和美（金久美子）一、病に倒れた夫（綿引勝彦）を最期まで看取った徳江（吉村実子）一。

紀子は、演劇に情熱を燃やす夫・健二（伊藤高史）との葛藤に悩みながら、様々な人々を訪ねて、それぞれの物語を知る。

37. かわいがってもらふこと

今日は、会員スピーチ例会です。「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマに、会員の安孫子桓さん、安孫子新さんのお二人からお話しいただきます。

さて、雇用保険のデータによると、就職後3年以内に離職している者の割合は、中卒で約7割、高卒で約5割、大卒で約3割に達しています。いわゆる「七五三現象」と呼ばれており、とりわけ最近では1年以内の離職者数が増えています。

その最大の理由として、「仕事が自分に合わないから」という、いわゆる「ミスマッチ」を挙げる若者が圧倒的です。

現代の若者像として、「努力を嫌う、トラブルに弱い、忍耐力がない、責任感がない」などがよく挙げられます。昭和世代の我々から見れば、確かにそういう傾向はあるようには思います。

しかし、雇用政策研究センターや社会教育センターの調査によれば、「嫌な仕事でも、精一杯努力すべきだ」と答える若者はかなり多いのです。言い換えれば、仕事の好き嫌いや満足・不満足にかかわらず、それなりの覚悟を持って仕事を頑張ろうと思っているということです。

一方、離職しないで勤め続けている若者の意識を調べたアンケート結果によれば、仕事内容に対する満足度は決して高くはないのに、職場の人間関係に対する満足度がとても高いという結果が出ています。

要するに、「仕事が自分に合わない」というのは早期離職の際の単なる言い訳であり、実は、

「職場の人間関係が上手くいかない」

というのが、早期離職の真の理由だということです。

就職に役立つように、また有利になるようにと、専門職の知識や技術を身につけ、資格を取得するための学校やセミナーに通う若者は少なくありません。しかし、肝腎の「人間関係を上手くやっていくための手腕や能力」を身につけることを、彼らはあまりにも「軽視している」、または「あきらめている」かのように思えてなりません。

若者が社会に出て初めて職場に入る時、最も大事なことは何でしょう。仕事内容の知識や技術でしょうか？ 資格でしょうか？

それらは、もちろん、ないよりあった方が良いでしょうが、すぐには役に立ちません。

なぜなら、新入社員は器具や道具が置いてある場所も知らなければ、器械の使い方も分からないからです。職場の指揮系統や役割分担、報告・連絡・相談の対象やタイミングにしても、その都度、教わりながら覚えていかなければならないからです。つまり、職場の状況や仕事の具体的な中身など、最初から分かるはずがないのです。

実際、それらを人並みにマスターするには、3カ月はかかるでしょう。それまでは、新入社員の給料はご祝儀みたいなもので、仕事に見合った給料とは言えないのです。

だとすれば、若者が社会に出て初めて職場に入る時、最も大事なことは、

先輩や同僚から「かわいがってもらおう」こと

ではないでしょうか。

かわいがってもらおうということは、職場の先輩や同僚から面倒を見てもらい、かばってもらい、そして上手くやっていけるということです。そうすれば、職場の状況や仕事の中身にも習熟していくでしょうし、多少のミスや失敗があっても落ち込まずにすむでしょう。やがて、先輩や同僚の支えられながらも、給料並みの十分な仕事もできるようになるでしょう。

そうなれば、仕事の内容に多少の不満があっても、若者は、簡単に離職などしないのです。

だからこそ、挨拶、言葉づかい、笑顔、愛嬌、明朗、素直、謙虚、誠実さ、やさしさ、感謝、責任感、我慢強さなどが大切なのです。なぜなら、それらは「かわいがってもらおう」ために必要なことであり、「心が通い合うためのコミュニケーション力」の基盤でもあるからです。

ところが、かわいそうに一。最近の子供達は誰からも

「かわいがってもらおう」ことの大切さを教わっていません。

それどころか、「等身大の自分」、「自分らしく生きる」、「みんな違ってみんないい」、「個性尊重」など、耳触りがよい言葉にどっぷりと浸かっています。

しかし、ロータリアンの皆様ならお分かりでしょう。20歳そこそこの若者に、「等身大で自分らしく」仕事をされたら、職場は崩壊するのです。

そういう普遍の真理や価値を、時世に惑わされることなく、きちんと伝える大人がいなくなったことこそ、今の子供達にとって最大の不幸なのではないでしょうか。皆様は、如何お考えでしょう？

38. 生きていく上で大切な心

本日は、台湾斗南友情交換事業を振り返る例会と題し、この事業で長年に亘り活躍してこられた会員の佐竹及彌さん、そして通訳の鈴木淑子さんから、思い出話しをご披露いただきます。後ほど、宜しく願い申し上げます。

さて、ここに、平成 21 年度の文部科学省委託事業「道德教育実践研究」という冊子があります。山形県教育委員会が発行したもので、私も委員の一人として作成に関わりました。

それには、小中学生に育みたい心として、「六つの自分」一、すなわち

「愛されている自分」

「認められている自分」

「良いところを自覚できる自分」

「目標に向かって頑張っている自分」

「友達と心が通じ合っている自分」

「みんなの役に立っている自分」

と書かれています。

企業経営者の皆さんはお分かりでしょうが、そういう「自分」の大切さは小中学生に限ったことではありません。大人の世界でも、いや大人の世界ならなおさら、そういう心を持てる自分が大切だと思います。

例えば、奥山吉一幹事、荒木浩理事、松田秀彦理事、阿部清理事、遠藤伸一理事をはじめ、今年度の理事役員のことを考えてみてください。誰もが、その「六つの自分」を持っています。

ここでは、いつも私を支えてくれている奥山吉一クラブ幹事を例にあげて、述べてみたいと思います。

「皆から愛されている 奥山さん」

「皆から認められている 奥山さん」

「自分の良いところを自覚できる 奥山さん」

「目標に向かって頑張っている 奥山さん」

「友達と心が通じ合っている 奥山さん」

「みんなの役に立っている 奥山さん」

如何ですか？ 最高でしょ！ これらは、間違いなく大人の世界でも大切な心です。これらを言い換えれば、「自信と愛と志」、「心の安定、心の繋がり、心の強さ・美しさ」、「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」など、今年度の寒河江ロータリークラブのテーマと結びつくことにお気づきでしょう。

気がかりなのは、小中学校でも大人の世界でも大切なこれらの心が、高校や大学では果たしてどうなのかということです。

というのは、勉学や自立心など、確かに高校や大学なりの目指すべきものがあるでしょう。しかし、その目指すべきものばかりにとらわれていて、生きていく上大切なこれらの心が、高校や大学では少々ないがしろにされているような気がします。

皆さんにも、高校や大学に通う子どもや孫がいらっしゃると思います。ぜひ何かの折に、話し合ってみてください。すなわち、

- 「皆から、愛されているかい？」
- 「皆から、認められているかい？」
- 「自分の良いところを自覚しているかい？」
- 「目標に向かって頑張っているかい？」
- 「友達と心が通じ合っているかい？」
- 「みんなの役に立っているかい？」

ここ 10 数年、我々は台湾斗南との青少年友情交換事業を続けてきました。その意義については、人それぞれ思うところは違うでしょう。

私自身は、子供達が台湾との交流を通じて、こうした「生きていく上で大切な心」に気づき、育んでいく契機となってくれることが、何よりの意義ではないかと考えています。皆様は、如何お考えでしょう？



▲昨年、醒醐小を訪問した台湾斗南ロータリークラブがそのお礼にサッカーボールをプレゼント。寒河江ロータリークラブが3月に台湾を訪れた際に預かり、同小に届けました(4月15日)。

39. 日米ロータリーの職業奉仕観

今年度の佐藤豊彦ガバナーは、「職業奉仕」を大切なテーマとして掲げました。私自身、「職業奉仕」については、何回か会長スピーチで述べてきたテーマですが、主に Guy Gundaker による古典的ロータリー理論の解説書「A Talking Knowledge of Rotary」を参考にしながらお話ししてきました。

というのも、立派で敬愛すべき多くの先輩ロータリアンの職業奉仕観の根幹は、多かれ少なかれ、Guy Gundaker の「A Talking Knowledge of Rotary」で育まれたものと思っているからです。

さて、「ロータリーの友」3月号に、興味深い記事が載っていました。2010年の国際協議会レポートとして掲載されていた田中作次氏（埼玉県八潮RC）、そしてRI理事で米国人のトーマスM. ソーフィンソン氏による職業奉仕に関するスピーチです。

田中氏は、

**「職業奉仕における法令順守、高い倫理的水準の推進とその実践は、
自ずと人と人との信頼につながり、仕事にも人間関係にも社会にも
良い結果をもたらしていきます。」**

と述べています。

この内容は、まさに Guy Gundaker が唱えた「ロータリアンの活動と利益」そのものです。ちなみに田中氏は、

**「ロータリー特有の職業奉仕を推奨・協調、実践すれば、未来における
ロータリーのさらなる発展を約束する原動力となるはずです。」**

と締めくくっています。

一方、ソーフィンソン氏は、

**「職業奉仕に従事するには、3つの要素があると私は考えます。
その第一は、私達の職業能力を生かして、恵まれない人々に奉仕することです。
第二は、職業を通じて、未来のリーダーを育成することです。
そして第三は、自分の職業の中で、また職業の枠を超えて、高潔性を育み、
推進していくことです。」**

と述べています。

要するに、田中氏が「職業上の倫理の実践が、自分達や社会に良い結果をもたらす」と述べているのに対して、ソーフィンソン氏は「高潔性を重視した職業を通じて、弱者救済とリーダー育成を目指す」と述べていて、目指すものが具体的で明確であること（弱者救済とリーダー育成）が特徴です。

最近のロータリーでよく耳にする言葉の一つに「戦略的 (strategic)」というのがありますが、ソーフィンソン氏の論法こそ、「戦略的」というべきものなのかも知れません。彼が米国人でRI理事の立場にあることを考えると、米国主導の国際ロータリーにおける「職業奉仕観」というのは、恐らく、そういうものなのでしょう。

いずれにしても、我々日本人にとっては、

**「道義に満ちた（≡倫理的で、高潔性のある）職業の実践は、
（弱者救済やリーダー育成だけではなく、）
周囲の者との良き人間関係の構築、地域住民の幸福、地域社会の発展を
もたらす」**

という理解が自然であるように思います。

決議23-34の取り扱い等も含め、日本のベテラン・ロータリアンの中には、昨今の国際ロータリーの在りように異を唱える方が少なくないことも分かるような気がいたします。皆様は、如何お考えでしょうか？

さて、本日は待ちに待った観桜会です。今年度は、コンパニオンは呼んでいません。職業奉仕を大いに語り合い、懇親を深める一夜となることを期待して、会長挨拶といたします。



40. 例会は「学びの場」

本日は、会員スピーチ例会です。「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマに、会員の木村仁一郎さん、長谷川真一さんのお二人からお話しいたします。

さて、1923-24 年度の R I 会長 Guy Gundaker は、彼の著書「A Talking Knowledge of Rotary」の中で、ロータリーの例会を「学びの場」と捉え、

- ① 会員の事業、生活、生き方に有益な情報を提供する場
- ② 会員同士が知識や意見を交換し、経験を語り合い、誠実な人柄に触れ、敬愛の念を深めていく場
- ③ 奉仕の心を学び、理解し、実践の意欲が湧き上がる場

が例会であると説明しています。

その上で、ロータリーは、

**ロータリアンにおいては「人間性の向上」を、
仕事においては「事業・職種・業界の発展向上」を求めるものであり、
社会においては「世の中を良くしていく向上運動」そのものである**

と述べているのです。

そして、それらのための「訓練の場」がロータリークラブであり、ロータリーの究極の目的は「素晴らしい真のロータリアンの育成である」と明記しているのです。

ここで思い出すのは、これらを喝破したかのような米山梅吉の言葉「**ロータリーの例会は、人生の道場である**」でしょう。さらに、1947-48 年度の Kendrick Guernsey R I 会長の「**入りにて学び、出でて奉仕せよ**」、四つのテストで有名な 1954-55 年度の Herbert J Taylor R I 会長の「**ロータリーは友情を作り、人を作る**」、さらに 1974-75 年度の William R Robbins R I 会長の「**ロータリーの第一の仕事は、人作り**」などの言葉も、Guy Gundaker のロータリー観を受け継いだものと言えるでしょう。

もちろん、ロータリーの「学びの場」は例会だけではありません。地区セミナー、P E T S、地区研修・協議会など、志を共にするロータリアンが出会い集いて連帯を深める場、すなわち「親睦を育む場」の全てが「学びの場」でもあるのです。

本日も、大いに学びましょう。ご清聴、有難うございました。

41. 同じ釜の飯を食う

今日は、寒河江RC名誉会員でもある寒河江市長、佐藤洋樹様をお迎えしてのゲストスピーチ例会です。「寒河江市政の動向と未来」というテーマで、お話しいただきます。

さて、中学校の教師と話をする、現場で最も心を砕いていることが2つあると言います。1つは、もちろん「学力増進」。もう1つは、「仲間同士の心の安定・心の繋がり」一、具体的には安心感、信頼感、一体感、団結力だそうです。

それだけに、仲間作りに苦労するという「中1プロブレム」を例に挙げるまでもなく、市内、いや、県内どこの中学校でも、合唱、運動会、修学旅行などの行事をことさら重要視しています。

それは、「仲間同士の心の安定・心の繋がり」を築くことに、中学校が如何に苦労しているかということです。

さて、佐藤洋樹市長の御尽力で、来年から市内の中学校に給食が導入されます。

これまで、母親弁当の意義、授業時間の確保、予算の遣り繰り、中学生の栄養、食育教育の大切さ、雇用増進、子育て支援、さらには政党間の思惑など、様々な観点から中学校給食に対して賛否の議論がありました。

しかし、そうした議論から完全に抜け落ちていた視点が、

「同じ釜の飯を食う」ことによる「仲間同士の心の安定・心の繋がり」
です。

新年会、忘年会、同窓会、結婚式、葬式、法事、もちろん寒河江RCの例会もそうでしょう。同じ時間に、同じ場所で、皆で同じものを食べるということは、仲間同士の安心感、信頼感、一体感、団結力、すなわち「心の安定・心の繋がり」を育む上で、最も効果的な方法ではないでしょうか。

中学校の教師や生徒の状況を考えた時、中学校に給食の導入に必要な理由は「同じ釜の飯を食う」という1点だけで十分ではないかと、私は常々思っていました。

さて、勝海舟と西郷隆盛による江戸城明け渡しの談義は有名です。しかし、その時が二人の初対面の場ではなかったと言われています。

実は最初の出会いとして、真偽については諸説ありますが（個人的には作話だと思っています）、西郷が安政の大獄で奄美大島に流された折、そこに勝が訪ねて行ったというエピソードが残されています。

もちろん安政の大獄を実施した幕府側に立つ勝は、西郷にとって憎き敵のはずです。互いに刀を脇に置き、片時も相手から目をそらさず睨みつけ、油断の素振りも見せない殺気立った雰囲気の中、二人の間にあったのが魚介類を煮込んでいた鍋だったそうです。

たまたま昼食時であったことが、二人にとって幸運だったと言えるのかも知れません。

やがて、物言わぬ西郷が、鍋の煮魚を皿にのせ、勝に差し出す。同じく物言わぬまま勝が、それを受け取り、口にする。そういう遣り取りが何度も続く中、いつしか二人は笑顔となったという話です。

このように、「同じ釜の飯を食う」ことは人間関係にとって重要な要素であり、「心の繋がり」の原点であると私は思っています。

最後に一。家族ばらばらの食事は、夫婦不和、家庭崩壊の元です。私も含めてですが、お忙しい皆様、ぜひ気をつけましょう。ご清聴、有難うございました。



42. JAへの期待

本日は、職場訪問例会です。JAさがえ西村山の日頃の取組み・活動の意義や素晴らしさ、そして苦勞の一端に触れられる本日の例会を、私自身、とても楽しみにしておりました。

人は、石油や電気がなくても生きていけます。携帯電話やパソコン、車がなくても生きていけます。しかし、水と食料がなくなったら、人は生きていけません。この当たり前のことを、我々日本人はもっと心すべきではないでしょうか。

開発途上国の発展に伴う人口増大、そして生活向上に伴い、近い将来、世界の水と食料は明らかに不足します。ということは、資源を持たない日本は、水と食料をもっともっと大切にしなければならないはずで、それだけに、これからの日本が「産官学」共同で取り組むべき最重要プロジェクトは、なんと言っても水と食料でしょう。

山形県は、毎年、大量の雪が降り積もり、その雪解け水を湛えて流れる最上川があります。しかも、カロリーあたりの食料自給率は100%を超え、北海道に次いで全国第2位です。要するに、日本から独立しても何とか食っていける数少ない県でもあるのです。

そういう意味では、水と食料が豊かな、そして人間性豊かな山形県は、いつの日か日本のリーダーとなる。私は、そう信じています。

日本の将来にとって、JAが果たすべき役割はとても大きいと期待しています。JAさがえ西村山の先見性と誇り、頑張りに敬意を表するとともに、このような例会を準備して下さった職業奉仕委員会をはじめ、関係者の皆様に感謝して、本日の会長挨拶といたします。



RID2800 2009-10年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

43. 花を咲かせる

本日は、寒河江チェリークアパークでの植栽例会です。早朝にもかかわらず、お集まりいただき。有難うございます。

鈴木・奥山年度もあと1ヵ月余りを残すばかりとなりましたが、最後の大輪の花を咲かせるべく、社会奉仕委員会の皆様が綿密な計画・準備を進めてくださいました。

朝早くからではありますが、皆様にとっては、文字通り、朝飯前の作業です。御協力、宜しくお願い申し上げます。



平成 22 年（2010 年）6 月 3 日

RID2800 2009-10 年度

寒河江ロータリークラブ

会長スピーチ

鈴木 一作

44. RYLAの今後

会長挨拶に先立ち、寒河江RCのチャーターメンバーで、名誉会員でもあった奥山智一先生、そして今野一雄・直前会長のお母様のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

お二人の葬儀に際しましては、会長、幹事、両副会長の四人でお手伝いをさせていただきましたこと、また、寒河江RCの慶弔規定に則り、生花・香典等の弔慰を捧げましたことを皆様に御報告申し上げます。

さらに奥山智一先生の葬儀におかれましては、チャーターメンバーの鈴木謹也さん、安孫子貞夫PG、奥山吉一クラブ幹事、ご親族とも相談の上、寒河江RCを代表して安孫子PGより弔辞をお読みいただきました。以上、御了解いただきたく存じます。

さて、本日は会員スピーチ例会です。「我が半生と仕事、ロータリーを語る」をテーマに、会員の峯田忠雄さん、荒木良一さんのお二人からお話しいただきます。

皆さんは「RYLA」を御存知でしょうか。これは、「Rotary Youth Leadership Awards」の頭文字をとった略称で、「ロータリー青少年指導者養成プログラム」と訳されています。本日は、この「RYLA」の起源と目的についてお話し申し上げます。

1959年、オーストラリアのクイーンランド州における自治権獲得100周年記念祝賀会に、イングランドのアレクサンドラ王女が出席することになりました。そこで、王女と同世代の青年達を招き、語らいの場を作ろうという計画が持ち上がりました。そのホスト役を務めることになったプリズベンRCは、「貴方のクラブから青年を一人出して欲しい。費用は全部ロータリアンが出してください。」というお願いを各クラブに呼びかけ、州内から優秀な青年達を集めたそうです。

青年らは、「新しい世界を作るために自分達は何ができるか」について王女と真剣に話し合い、1週間を共に過ごしたそうです。このプログラムを通じて、「こんなに立派な青年達がいるなら、これからも応援してあげよう。その若者達が色々な奉仕活動をしていきたいなら、支援しよう」という話が持ち上がりました。これが、「RYLA」の起源と言われています。

それから12年後の1971年、地域社会の指導者、そして善良な市民としての資質を伸ばすことを目的に、国際ロータリーの正式な事業として始まったのが「RYLA」です。ちなみに、その5年後の1976年には日本でも始められました。

現在、日本各地で行なわれているRYLAは、個人的に色々調べてみましたが、ここ2800地区も含めて概ね次の通りです。すなわち、

**「地区内全域から青少年を数十名集め、ロータリアンと1~2泊を
共に過ごしながらか、指導力を養い、奉仕の精神を伝え、友愛を深める」**

といった内容です。

しかし、青少年の指導力・奉仕・友愛が目的なら、同様な事業は地域や学校でも実施されています。例えば、県や市も青少年の宿泊体験型リーダー研修などに力を入れていますし、ここ寒河江市ではボーイスカウトやガールスカウトの活動も盛んです。

RYLAでは、青少年とロータリアンとの関わりの重要性を説く方がいらっしゃいます。私も全く同感です。しかし、これまで2800地区のRYLAが果たしてそうであったかと問われれば、「講師による一方的な講話」、「支援や参加というより見学に近い(しかも少人数の)ロータリアン」、「交流やコミュニケーションには繋がりにくい研修プログラム」、等々、とても十分であったとは言えないのではないのでしょうか？

そういう意味では、寒河江RCが長年に亘って継続してきた学校での絵本読み語り活動、職業講話、インターンシップ、就職模擬面接指導などは、それらの意義はもちろん、ロータリアンと関わるという点でも、本来あるべきRYLA以上の素晴らしい事業だったように思います。

私は、山形県のロータリアンに考えて欲しいことがあります。それは、

**「我々にとって最も肝腎な山形県に住み続け、真摯に働き、家庭を築き、
地域を担い、私達の老後を背負ってくれる一般の若者達は、果たして
ロータリーの恩恵を十分に受けているのでしょうか？
少子高齢化と人口減少に苦慮する山形県だからこそ、もっと彼らに
目を向け、皆で彼らを立派に育てていくロータリー事業が盛んで
あって欲しいと思うのです。それだけに、インターアクト、ローターアクト、
そして、RYLAのさらなる充実を願ってやみません。」**

いずれにしても、2800地区のRYLAを見直す、または立て直す時期に来ているという認識を持ったロータリアンは少なくないようです。実際、先日の地区でのRYLA研修会では、そういう観点から話し合いが持たれたと聞いています。

このあと、社会奉仕委員長からも委員会報告としてお話しがあると思いますが、山形県における意義あるRYLAはどうあるべきか、考える機会となれば幸いです。ご清聴、有難うございました。

45. 「心の強さ・美しさ」の反響

本日は、日本政策金融公庫中小企業事業の山形支店長、岩城守さんを迎えてのゲストスピーチ例会です。「美しい山形の地域資源」をテーマに、お話しいただきます。

さて、昨年、市内 350 人の小中学生から応募があった「心の強さ・美しさ」というテーマの詩や作文ですが、皆様の御協力のおかげで、社会奉仕委員会で文集にまとめ、応募者の児童生徒に渡したことは、既にお伝えしたと通りです。

その際、余った文集 30 冊ほどを、希望があった県内外の校長や教頭にお配りしました。しばらくしてから感想が送られてきましたが、多少のお世辞はあるのは承知の上で、その幾つかを抜粋して紹介したいと思います。

鶴岡市の小学校の校長は、

「心の強さ・美しさは、まさに現代を生きる子ども達に育てていかなければならない心情だと、あらためて強く思いました。しかし、こういう言葉を学校現場はもとより、家庭や社会でも使わなくなっていることも事実です。そういう意味では、私自身、反省することしきりです。それでも子ども達は、心の強さ・美しさに憧れ、それが足りない自分に苦しみ、或いはそれを目指していることを知り、嬉しく思いました。本校においても、心の強さ・美しさを意識した運営を心掛けてゆきたく存じます。ぜひ、こうした取組を今後も続けてください。」

また、上山市の中学校の校長は、

「通常、この種の文集では、優秀作品だけ掲載されているのが一般的です。しかし、それだと一般の生徒らはほとんど目を通しません。例え教師が優秀作品集を教材として採り上げても、生徒達はそれを単なる教材としか見ず、自分のこととして考えたりしないのが普通です。それだけに、今回いただいた文集は、応募作品を全て収載してあるという点で価値あることだと思いました。恐らく応募した全生徒は、少なくとも同学年の仲間が書いた作品は全部読んだことでしょう。ご存じのように、中学校の大きな課題の 1 つに『心の繋がり』というのがあります。すなわち、何をどう考えれば良いか、それをどう伝えれば良いか、どう互いに理解・共感し合っていけば良いかが大きな教育課題です。それだけに生徒らは、今回、身の回りの仲間達が『心の強さ・美しさ』をどう考えているかを興味深く読み、共感したり安心したりしたのではないのでしょうか。それは『心の繋がり』という点で、生徒達にとって大きな収穫だったように思います。」

最後に、昨年度末に醍醐小学校からいただいた学校文集にあった作品から、2つ紹介いたします。いずれも、寒河江RCがハートフルセンターで開催した「子ども達の心の強さ・美しさを考える集い」において、優秀作品発表会で体験したことを書いた作品です。

【6年女子】「いよいよ本番／ステージには照明がいっぱい／目の前にはたくさんのお客さん／ドキドキ、ドキドキ／どんどんその音が大きくなる／きんちょうがマックスに／みんなの視線を感じる／がんばらないと／がんばらないと」

【5年男子】「～中略～ たくさんのお客さんの前で作文を読みました。読むときはドキドキしました。途中にお母さん達の顔が見えました。ドキドキしていた心が、少し落ち着きました。そこからは、堂々と読むことができました。読み終わったときは『終わった』と思いました。僕は、学校に入って、初めて大きな賞状をもらいました。」

以上、「心の強さ・美しさ」をテーマとした今年度の社会奉仕事業に対する反響をお伝えいたしました。多少なりとも、地域社会に対して価値ある奉仕事業が出来たように思っています。ご清聴、有難うございました。



46. 思いは叶う

本日は、「四大奉仕委員長が 1 年を語る例会」です。荒木浩さん（クラブ奉仕委員長）、松田英彦さん（職業奉仕委員長）、阿部清さん（社会奉仕委員長）、遠藤伸一さん（国際奉仕委員長）の 4 人が、この 1 年の苦勞や喜びを語ってくださいます。

なんと言っても、あれもこれもと欲張って奉仕プロジェクトを立ち上げてきたクラブ会長のもと、例年の数倍は苦勞させられたのではないのでしょうか。本当に、有難うございました。おかげで、思いは叶いました。

さて、ロータリーの友 5 月号に掲載されていた「人づくりはモノづくり」を読んで、私は何度も涙ぐみました。それは、大阪の中小企業の集まりが中心となり、重さ 50kg、50cm 四方の小型人工衛星『まいど 1 号』を「産官学」共同で作り上げ、しかも打ち上げに成功したという話です。

「産官学」共同によるプロジェクトとは言っても、実際には関係する組織や集団の文化の違い、感覚の違い、思惑の違い、力量の違いもあるはずです。当然、試行錯誤、苦勞と挫折を何度も繰り返したことでしょう。恥をかいたこと、悔しかったこと、腹が立ったこと、投げ出したくなったこともあったでしょう。

それでも成功に至ったのは、次のようなリーダー達の熱い思いがあったからだと書かれています。すなわち、

「同じ人間同士、目標が同じなら顔を合わせて話せば分かる、通じる、前に進む」

実は、その記事を読んでいて、私は今年度の当クラブの社会奉仕事業「心の強さ・美しさ」を思い出しました。まさにそれも、児童生徒、市内 11 の小中学校、市校長会、市教委、県教委、市行政、プロの俳優、演劇集団、そしてロータリークラブによる共同プロジェクトでした。当然、ロータリーの友の記事に書かれていたような苦勞や思いを、我々も同じように味わいました。

実際、阿部委員長にしても私にしても、市内 11 の小中学校の全てに、何度足を運んだか知りません。市教委にも何十回と出向きました。多少の課題や心配はあったものの、それらを何とか乗り越え、多くの人の理解や協力を得て事業を成功に導けたのは、やはり

「同じ人間同士、目標が同じなら顔を合わせて話せば分かる、通じる、前に進む」
という思いでした。

もちろん、社会奉仕事業はそれだけではありません。チェリー・クアパークでの植栽事業、ロータリーの杜での清掃事業でも、綿密な計画と準備と苦労がありました。

さらに、寒河江高校農業校舎やJAさがえ西村山での「職業奉仕事業」、台湾斗南RCとの青少年友情交換をはじめとした「国際奉仕事業」、近隣クラブとの合同例会やクラブ・フォーラム、そして懇親会などの「クラブ奉仕事業」にしても、頭が下がる準備や苦労の末に、思いが叶ったのです。

私は、歴代の寒河江RC会長の中でも、本当に幸せ者だと思っています。



(2010年 理事会・新年会 於：鈴木一作会長自宅)

47. 会長年度を終えるにあたり

早いもので、寒河江 RC 創立 51 年目の鈴木・奥山年度もフィナーレ例会を迎えました。今年度最初の 7 月 2 日の例会で、「51 周年・新たなる旅立ち」というテーマのもと、「温故知新」、「温故創新」、「自信と愛と志」、「心の安定、心の繋がり、心の強さ・美しさ」、「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」の 5 つのスローガンを大切にしながら、皆様の心に残る年度を目指し、理事役員一同、精一杯頑張りますと誓いました。

果たして、この 1 年間、会員の皆様の心に残る、有意義で楽しいロータリークラブだったでしょうか。少なくとも私は、心に残る、有意義で楽しいロータリークラブでした。

さて、本日のフィナーレ例会は、寒河江 RC 創立通算 2500 回目の例会にあたります。そこで、創立通算 2500 回例会記念事業として、長岡山の「ロータリーの杜」に赤と白のハナミズキ植樹を行うとともに、会員に加え、奥様方と一緒に 1 年を振り返るフィナーレ例会を企画いたしました。

実は、寒河江 RC のこうした懇親の機会は、IM や近隣クラブとの合同例会を含めて今年度 13 回目です。地区大会や台湾での懇親会も入れれば、20 回を超えます（台湾では毎晩、懇親会）。また、会員スピーチは 17 人で、目標の 16 人以上を達成しました。さらに、フォーラムや特別月間の基調講演も含めれば、今年度は延べ 50 人の会員が壇上でスピーチをされました。それでも、ゲストスピーチは 14 人です。寒河江 RC では、これらの数はいずれも最高記録かも知れません。

例会を休みとしたのは、盆と大晦日、祝日の 4 回だけです。要するに、今年度は奥様方が昼食の準備をする回数が少なかったはずで、そして、今夜は奥様方も招待いたしました。いずれも、例年ではなかったことです。それらに免じて、旦那達の懇親会が多かったことをお許してください。

今年度は、次代を担う子供達の健全育成を大きなテーマに掲げ、職業奉仕、国際奉仕、社会奉仕の各事業の根幹に据えたのは子供達です。後ほど、この 1 年間の我々のロータリー活動を 30 分にまとめたビデオをご覧ください。会員の皆様には、選びに選び抜いた「映像」と「曲」と「歌」に込めた、そして登場する子供達の真剣な眼差しと素晴らしい笑顔に託した私の想い、そして何より、今年度理事役員の真摯で誠実な熱い心意気を感じていただければ幸いです。

また、奥様方におかれましては、この 1 年間の旦那様方の奮闘ぶりをビデオをご覧ください、さらに本日の懇談を通して、それらが我々のロータリー活動への益々の理解・応援に繋がっていくことを期待して、名残惜しいのですが、今年度最後の会長挨拶といたします。

51周年「新たなる旅立ち」の総括

2009～2010年度 会長
鈴木 一作

1959年に創立され、先輩諸兄が歴史と伝統を築き上げてきた寒河江ロータリークラブ。50年という半世紀が経過し、この栄えある年度に第51代の会長職を最後まで無事に務めることができましたことを、皆様に心より御礼申し上げます。この年度は、「51周年 新たなる旅立ち」という思いを胸に、5つのスローガン「温故知新」、「温故創新」、「自信と愛と志」、「心の安定、心の繋がり、心の強さ・美しさ」、「お願い、あなたが必要、頑張れ、ありがとう」の実践に努めました。これも、心熱い有能な理事・役員・委員長に恵まれ、かつ会員の皆様の理解と友情に支えられたからに他なりません。今は、親愛なる第52代の早坂源重会長へ無事にバトンを引継ぐことができ、安堵の喜びでいっぱいです。本当に有難うございました。

5つのスローガンの実践に根ざしたこの1年間の活動の詳細については、各委員長より別に報告がありますが、会長として特に重視し、かつ実現できた点を下記に列挙し、本年度の会長総括といたしたく存じます。

(以下、敬称略)

- 1) 盆暮れと祭日は休会だが、それ以外に理事会指定休会日は設けない
- 2) 会長挨拶では、月1回以上はロータリー情報をテーマして話す(合計18回の実施)
- 3) 多くの会員にスピーチの機会を設ける(合計で、延べ50名の実施)
 - ① 会員スピーチ例会(17名:統一テーマ:我が半生と仕事、ロータリーを語る)
安孫子新市、安孫子桓、荒木良市、井田辰男、市川芳章、遠藤伸一、大江俊悦、大沼孝己、奥山吉一、木村仁一郎、佐竹及彌、佐藤宏利、武田稔、長谷川真一、早坂源重、松田信弥、峯田忠雄
 - ② 直前会長・直前幹事スピーチ(2名:今野一雄、池田郁太郎)
 - ③ 四大奉仕フォーラム(8名:寒河江RC会員による基調講演/テーブル・ディスカッション)
・クラブ奉仕を考える(安孫子貞夫、大竹正) ・職業奉仕を考える(菅野耕吉、早坂源重)
・社会奉仕を考える(阿部清、大沼保義) ・国際奉仕を考える(佐藤敏、古澤康太郎)
 - ④ 四大奉仕委員長スピーチ(4名:荒木浩、松田秀彦、阿部清、遠藤伸一)
 - ⑤ 雑誌解説(6名が各2回:相座弘寿、安孫子桓、安藤博章、小野承信、今野一雄、船田浩三)
 - ⑥ 職場訪問例会スピーチ(1名:古沢明)
 - ⑦ 特別月間例会
・会員増強・拡大月間(安藤博章、柏倉亮祐) ・新世代のための月間(ゲスト:今田裕美子)
・米山月間(池田郁太郎) ・職業奉仕月間(職業奉仕フォーラム)
・ロータリー財団月間(小松栄一) ・ロータリー家族月間(歳忘れ家族例会)
・ロータリー理解月間(船田浩三) ・世界理解月間(国際奉仕フォーラム)
・識字率向上月間(社会奉仕フォーラム) ・ロータリー雑誌月間(船田浩三)
・ロータリー親睦活動月間(創立通算2500回記念例会・奥様同伴フィナーレ)

4) ゲストスピーチ例会 (合計 14 名)

- ・テーマ：心の強さ・美しさ (安孫子一彦、荒木利見、青塚晃、岩城守、奥山貴大、木村幸一、今田裕美子、佐藤敦、佐藤洋樹、志田峰雄、鈴木淑子、村松洋一)
- ・テーマ：我が半生と仕事、ロータリーを語る (寒河江さくらんぼRC：佐藤功二、大江RC：藤野和男)

5) 懇親会 (12 回の実施 (+ 地区大会 + IM + 台湾各地での懇親会で、合計 20 回以上))

クラブ奉仕フォーラム／職業奉仕フォーラム／社会奉仕フォーラム／国際奉仕フォーラム
上半期クラブ・アッセンブリ／下半期クラブ・アッセンブリ／観桜会／西川月山RC合同例会
台湾斗南友情交換歓迎例会／台湾斗南友情交換帰国送別会／歳忘れ家族会／奥様同伴フィナーレ

6) 近隣RCとの合同例会

寒河江さくらんぼRC、西川月山RC

7) 特別例会の実施

クラブ創立記念例会／職場訪問例会／花咲かフェア植栽例会／創立通算 2500 回記念例会

8) 第 4 ブロック IM ホストクラブ担当

8) 若い会員が知らないロータリーソング「それこそロータリー」を合唱する (合計 4 回の実施)

9) 寒河江高校農業校舎での就職面接指導・職業講話・表現力ワークショップ事業

10) 「心の強さ・美しさ」に関する小中学生の文集作り

11) 「子ども達の心の強さ・美しさを考える集い」の開催 (表彰、朗読、鼎談、一人芝居)

12) 台湾斗南友情交換事業：受け入れと派遣 (小中学生の短期交換留学)

13) チェリークアパーク花咲かフェア植栽事業

14) 創立通算 2500 回例会記念事業 (ロータリーの杜の整備・植樹事業、奥様同伴フィナーレ)

15) 左沢高校インターンシップへの協力

16) 寒河江ボーイスカウトへの協力

17) アンデルセン絵本読み語りの会への協力

